

---

# けいおん！ ~ light music love story ~

あーずにゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

けいおん！〜light music love story〜

### 【Nコード】

N4763R

### 【作者名】

あーずにゃん

### 【あらすじ】

父親の身勝手で、一人暮らしをすることになった夏季拓也。これから暮らしていく部屋の隣にちっちゃくてかわいい同学年の中野梓が！新しい拓也の生活が始まる・・・！

けいおん！のオリジナルストーリーです。初めて書くので誤字、脱字、アドバースなどございましたらお願いいたします。> (´) (´) <

## 第一話 美しい隣人？

．．．今、俺は無駄に広い部屋に一人で悩んでいる。

中学三年生の12月、受験シーズン真っ只中なのに、俺、なつきたくや夏季拓也は一人暮らしをすることになった。

理由は父親の転勤。

「チッ！クソジジイがっ！」

わかると思うがクソジジイとは俺の親で、世界でも指折りの外科医．．．らしい。

そして昨日、「拓也、俺仕事。明日から一人暮らしな。夜露死苦！」

ふ、古い！いやそれより、ちょっと待て。どうゆうこと？

「だから」

そういつて俺は、俺が住むところらしい住所と鍵を渡された。

「じゃ」

そういつて親父は海外へ行ってしまった。

・・・で今この状況だ。

「まあ悩んでも仕方ないか。とりあえず隣へ挨拶に行こう。」

無駄に広い2LDKの部屋を出て、隣の部屋のチャイムを押す。

ピンポーン

「はい！」という声が聞こえ、ドアが開いた。

出てきた女子を見て、俺は固まった。

か、かわいい！だけど小さい！（胸もだけど身長が）

でも、なんか見たことあるぞ・・・？

「あの～・・・もしかして・・・夏季君？」

「ああ、そうだ、たしか・・・2組の・・・」

「中野梓だよ」

「あっ、ごめん」

「で・・・何か用？」

「あ、実は俺、隣に越してきたんだ。で、その挨拶に」

「そっか。よろしくね！」

「おう、よろしく！」

じゃあね、といって会話を終えた。この時俺は。

「やった あんなかわいい子となりだ！うっれっしい」

・ ・ ハイ、すみません キモかったですよね ・ ・ ・

どうも！あーずにゃんです！僕自身中学生なので、誤字、脱字、指  
摘、アドバイスなどございましたらよろしくおねがいします！

ー ) ^

## 第二話 朝の訪問者

引越してから二日目、今日は土曜日だ。一応受験生なので、勉強をしなければならぬ。

ピンポン

部屋のチャイムが鳴った。

「はい」

誰だ？まだ朝の五時なのに・・・（梓のことを妄想して眠れなかった・・・）

「な、夏樹君？ちよ、ちよっと部屋入れてもらっても良いかな？」

「え、え？な、なんで?!ちよっとまって!掃除してから・・・」

俺が慌てる理由は、実はさっきまでエロ本を広げて、あらぬことしていたから、エロ本がリビングにおいてある。

ばれたら学校中で噂になっちまうっつ！

まあ、男子なんて誰でもしているとおもっが。

無理矢理部屋に入ろうとする梓を両手を広げて、必死に防ごうとする。が・・・その小さい体を生かし俺の腕を通り抜けていった・・・

「きゃっ！なにこれ?!」

・・・予想どつりのリアクションありがとうございます・・・

部屋に入ると、梓はエロ本ではなく、棚においてあったネコミミにドン引きしていた。

「拓也、これ・・・なに?ま、まさか女装・・・とか・・・?」



ヤバイ．．．チョー冷たい目で見られてるっ！あれ？でも今こいつ、俺のこと呼び捨てにしなかったか？  
いや、今はどーでも良いでしょっっ！否定しないと！

「あ、梓、こ、これはー、そのー、そう、コスプレが趣味で．．．」

ヤバイ！

もっとまずいこといつちまった！！

もういいや、いっちゃんおう．．．。

俺はネコミミが大好きだって！

「あ、あのな、俺は．．．」

「ね、ねえ今、私のこと梓って呼んだ？」

「よ、呼んだけど、だって梓もさあ、よんだじゃん」

「き、きもい．．．。」

グサツ！ あ、すいません、俺の心に刺さった音です・・・

「あ、ごめん！本音出ちゃった」

そっちのほづがきついですよ。

「まあ・・・いいや・・・で、何の用だ？」

本当はよくない！

「実は・・・今日だけ、泊めてほしいの」

え？

今なんと???

男の部屋に、それも目の前にエロ本がおいてある家に泊めてくれっ

ていつか？

「いいけど・・・」

なんでわざわざ俺の家に？

んまあ、なにかしらの理由があるんだろっけど・・・。

どうも！あーずにゃんです！僕自身中学生なので、誤字、脱字、指  
摘、アドバイスなどございましたらよろしくおねがいします！

— ) ^



### 第三話 俺のプライベートは!?

早めの更新です！評価よろしくお願いします！

梓が家に泊まりに来てから五日目、学校ではお互い見て見ぬフリをしていた。

が、家に帰るとだらだらと姿が変わる。

学校で「おしとやかな美少女」的なイメージですが、その面影はまったくくない。

そして今は夜の七時。

梓は俺の作った特製チャーハンを食べている。

そして皿を差し出して「おかわり!！」と叫んでいる。

昨日までは梓の母親が飯を届けにきていたが、今日はいないらしい。

ちよつとまで・・・梓の親は何を考えているんだ？中三の娘を男の家に一週間も泊めるなんて・・・

普通だったら襲うぞ・・・（襲わないけど！いやマジだよ！！犯罪だし・・・まあ本当は襲いたい・・・いや何もありません）

「うまかったか？」

「うん！おいしいよ！..！」

「...太るぞ」

「..！」

ドスツと小さい手でわき腹を軽くたたかれる。

梓は「えへへ...」といたずらっぽく笑っていた。  
そんな梓にチャーハンを渡す。

「ほれ」

「うんー。さっぽおいしー！またつくってね。」

か、かわいい！これなら作った甲斐がある・・・！

「何にさっしてんの？」

「いや・・・なんもねえよ」

「そう？だったらいいけど・・・」

・・・飯を食ってから時間がたち、今は十時。  
梓は寝ているので、さっそくエロ本を・・・

「・・・なにしてんの・・・？」

「あ、いや、こゝこれは保健の勉強を．．．」

「ま、まあ拓也も男の子だし、そういうのに興味をもってるのもしようがないとおもっけど．．．お、女の子がいる部屋では．．．ねえ．．．?」

「わ、わかった!今、かたずけるから!」

い、いやな予感がする．．．

「．．．とりあえず、没収!!--!--!」

予感的中．．．

この日、俺は完全にプライベートをなくした．．．(エロに関して)  
の)



その後．．．十二時になり梓が「一緒に寝よう？」とか怯えた目つきでいつてきて、その目を見て断れなかった弱き俺は一緒に寝ることになったが．．．もちろん俺は興奮して眠れるわけもなく、ほとんど寝ない状態で学校に行くことになった．．．

。後から聞いた話によると、なぜか一人では眠れなかったらしい．．．

### 第三話 俺のプライベートは!?(後書き)

ども!

あーずにやんです!

今回は早めに更新してみました。

感想、誤字、アドバイスなどございましたら、ご報告よろしくお願  
いします。

#### 第四話 みぞおちはやめようか!?

梓は隣の自分の家へ帰った。

梓がないと、ちょっとさびしいが楽だ。

部屋も荒らされないし、料理も一人分だけで良い。

「よし!とりあえず掃除すつか!」

荒らされた部屋の掃除を始める。

「ん?何かテレビ台のわきにはさまってっぞ?」

手を突っ込んで取り出す。

「梓のだな・・・こんなところ入れんなよ」

パラパラとページをめくっていると、明らかに折り目がつきすぎているページがあった。

「なんだ・・・？これ？」

そのページの見出しには、”オトコをおとす三か条！”  
と書かれている。

「つたく・・・。誰を落とすんだか。」

ハア、とため息をつきながらテーブルに雑誌を置く。

「・・・。？」

あれって、男を落とすためにやるやつだよな・・・

「まさか・・・梓は俺のことを・・・す、好き？」

やばい！

おさまれ！

興奮している場合じゃないぞー！！

「んなわけないじゃん!」

「うお!か、勝手に入ってくるなよ!」

「そんなことより」

そんなことじゃないよ!!犯罪レベルだから!

「なんで、私が拓也のことを・・・その、す、す、好きって思ったの?」

「い、いや、だってその雑誌に・・・ほら!」

俺はやけにに折り目のついたページを開き、梓の前で見せる。

「こ、これは、その・・・そう!練習したの!い、いぞという時の・・・ね?」

「いや、ね?」って・・・てかいぞという時って何だよ!

ま、まあ、年頃の女の子だからいろんな事情があるよな・・・。

・・・このときの俺は、気が動転していて気づかなかったが、梓はこのとき俺のことを好きだということは否定しなかった。

「そつだ！夕飯食ってくか？からあげだぞお？」

「え？ほんと??食べていく!」

「よしちょっと待ってる、今作るから。」

から揚げの肉は国産モモ肉。一番高いやつを買ってきた。親父が家賃も含めて一ヶ月二十五万振り込んでくれるので、贅沢ができるのだ。

そして山盛りのから揚げとごはんをテーブルに持っていく。

そもそもなぜ俺がこんなに家事ができるかというところから親父が楽をするためにみっちり教えられたからだ。

「うん！おいしい！すごいねー、料理ができる男子ってなんかカッコいいよ〜。」

「なっ！そ、そんなことねえよ。」

「照れてる??？」

「・・・うるせえ」

こんなことを話していたら、いつの間にかから揚げが三分の一しかなくなっている。

まだ二個しかたべてないのに！（アムロ風）

「え！何で泣いてんの！？から揚げならあげるから！ほ、ほら！」

そういつて梓は三分の一になったから揚げの皿を俺に差し出した。

「もっと食ってもいいぞ？」

「いいよいいよ！全部食っちゃって！」

梓はそういつてはいたが、ずっとから揚げを見つめているのでひとつつまみ、口に入れてやると

顔を赤くして何かしゃべろうとしている。

・・・かわいい！！！！

「もう一個！」

そして俺は最後のから揚げを食われた・・・

「じゃあ、また明日！」



「お、おう！じゃあな！」

「．．．なんかどつと疲れが出たな．．．寝よ．．．」

翌日．．．俺は五時に起きて勉強をして、弁当と朝飯をつくり、七時半に家を出た。

そしてあっという間に、放課後、俺は担任に呼び出された。

悪いことをしたわけではない、進路についてだ。

そして今は進路調査票とにらめっし。

「……い。……おい。拓也！」

「お、おう！何だ？」

びっくりして声が裏返ってしまった。

今話しかけてきたのは、俺の親友の佐藤さとう勇氣

俺よりイケメンで、俺と同じくらい頭が良い。  
ただこいつは……チャラ男だ……。

「で、進路どうすんだ？俺らの成績なら、新潟高校行けるぞ？」

新潟高校というのは、俺らが住んでいる新潟で一番偏差値が高い高校だ。

「ん〜。まだいいだろ。ゆっくり決めようぜ。」

「そうだな．．．帰るか．．．。」

「おう！」

帰ろうとした時、「ねえ、拓也」と呼ばれた。

「おう！あず．．．」

「え！？超かわいい！え、なに、拓也知り合い？」

．．．興奮すんな。きもいぞ．．．

キモイからちょっと苦しめてあげよう。

「あのなあ勇氣。あ・ず・さはなあ、お・れ・の家に．．．」

．．．梓さん．．．みぞおちは痛いですよ．．．

ちよいまち！

それ何？

カッターですか？？

さすがにそれはやばいって！

「わ、悪い勇気。ちよっと急用を思い出した。じゃ、じゃあな！！」

答えも聞かず俺はダッシュ。

家に向かう。

鍵を開け、中に入り、鍵を閉める。

すると五分後にチャイムが鳴った。

．．．まあ誰かわかるが、無視するわけにはいかないだろ．．．

案の定、梓がいた。

「なんでにげたの？刺すわけ無いじゃん！」

そうか．．．そうだよね．．．刺さないよね．．．けどさあ、梓さん、カッターもって言っても説得力ないよ．．．

「え！？拓也泣いてる？うそだよ！うーそ！ほら、泣かないで！」

なんか最近なく回数が格段に多くなってる．．．。

梓はちっちゃい手で俺の頭をなでた。

「でも．．．次、学校で泊まったこといったら、マジで刺すかもよ？」

．．．まあ梓がやけににやけてるから、刺すことは無いだろ．．．  
てか、さしたら犯罪だし！

「じゃあ、何か走って疲れちゃったから、じゃあね、拓也」

そういつて家に帰っていった。

家に帰って、飯を食って寝ようとする、勇氣からメール。

内容は「見ろよ！！梓ちゃんに似てね？」

写真がついていて、それは梓に似ている女性のエロ画像

「こんなもん送ってくんよな・・・」

携帯を閉じ、ベットに入る、その時ふと思った。

「・・・梓の寝顔を知ってるのは俺しかないんだな・・・」

そんなことを思っていると、なぜか急に恥ずかしくなってきた。

でもこのときの俺は、自分が誰を好きだかわかっていない・・・

**第五話 進路決定！（前書き）**



## 第五話 進路決定！

．．．なんか、今日は四時に目が覚めた。

何で眠れなかったって？

別に．．．梓のこと考えてたわけじゃねえよ．．．

キモッて．．．何で？．．．そうです．．．わざとばらしました．．．  
．．．  
すいません．．．

まあこれは冗談で、ほんとになぜか知らないが、目が覚めた。

「ひまだなあ．．．そうだ勇氣におはようメールをしてあげよう！」

そして携帯を開き、勇氣に「朝だ！！起きろ！」

というメールを十件送る。

そうすると、勇気から、「なんだよ!!うるせえな!」という電話が来る。

・・・勇気はこうくると思ってたぜ。長年の親友だけあって、俺は勇気の次してくることがわかる。

「あつれえ〜?俺にそんなこと言ってるいいのかなー?」

俺は偉そうな口調で、勇気にそう返してやった。

「な、なんだよ」

「お前高校まだ決めてねえだろ??？」

「そうだけど・・・お前もだろ・・・？」

「そつだよ。で・・・お前は梓のことどづ思つっ？」

「なっ！まさかお前っ！梓ちゃんのいく高校を教えてくださいのか？  
「？」

・・・こついつときだけ勘が鋭い・・・。さすがチャラ男だ。

「・・・まあ、そついつことだよ。で・・・梓呼ぶから、うちこね  
えか？」

「おう！いくいく！！てかお前と梓ちゃんはどんな関係・・・」

ブチッ・・・ツィ・・・ツィ・・・ツィ

・・・あいつ興奮しすぎて、電話、切ったな・・・

・・・五分後、勇氣は汗だくで、俺の家に来た。

ちなみに、勇氣の家から俺の家まで、チャリでも七分くらいかかる。

「で！梓ちゃんはどこだ？？」

勇氣・・・お前パジャマかよ！？

「・・・今から呼ぶんだよ。まってる」

そういつと、勇気は相当眠たかったらしく、玄関で寝始めた。

きもいぞ勇気・・・

そんな勇気をほっというて、俺は梓にメールをおくる。

一分後、梓は家に来た。

「どこ？ケーキは？？」

梓は無類の甘いもの好きなのだ。

それを利用して、「ケーキ作ったぞ！」というメールを送らせてもらった。

「ほら、ケーキ。」

一切れだけ残っていたケーキを、梓に渡した。

梓はそれを、あつという間に食い、「えっ?!なんで佐藤君もいるの?」驚いている。

「まあ説明するよ、とりあえずあがれ。」

玄関で寝ている勇氣と、顔にクリームをつけまくっている梓の手を引っ張り、リビングへと連れて行く。

「で・・・呼んだ理由は?」

「それがなあ・・・梓、もう進路決めたか?」

「まだ決めてないけど・・・あっ！もしかして高校一緒に行くの？」

「そう！そう思ったんだよ。なあゆう」

「ぐーーーーー・・・」

この音は勇気の寝息・・・らしい。まだ寝てんのか！

「おい、おきろー！梓いるぞっ？」

ぐーーーーー・・・

「・・・ま、まあいいはほっとじぶ。で・・・梓は行きたい高校とかあんのか？」

「うーん．．．行きたいわけじゃないんだけど．．．そこがマシかなって．．．」

「どーだよ？」

「桜ヶ丘高校なんだけど．．．」

「えっ！あそこって女子高じゃなかったっけ？」

「ううん。あそこって今年から、共学になったんだよ？」

「へえ。で、何でそこに行きたいんだ？」

「ううん。えーっとねえ、私って、あんま男子と話すの得意じゃ



ないの。だから、女子が多い、前女子高だったところがいいかなーって……」

「……そうか、だけど梓は桜ヶ丘高校いけんのか？あそこって結構偏差値高いぞ？」

「うーん……。がんばるよ！だから、その、お、教えてね？明日から！」

「お、おう。」

何か知らないが、梓がやけに照れているので、俺も軽く照れてしまった。

「もう、六時半じゃねえか！準備しねえと。」

「そうだね。じゃあまた学校で！」

そういつて梓は家を出て行った。

「勇気!!」

勇気の耳元で思いつきり叫ぶ。

「おわ!何だよ?」

「梓帰ったぞ。てか、もう六時半」

「マジで!何で起こさなかったんだよ!てか六時半!?!もう帰るわ  
!」

そういつて、勇気も帰っていった。

「俺も準備しないと．．．遅れちまう。」

俺は急いで準備し、学校へ行った。

．．．そして学校でもう一度集まり、俺たちは桜ヶ丘高校を受験することに決めた。

放課後、俺たちは教務室へ向かい、進路調査票を提出した。

「なんだ．．．お前ら全員桜ヶ丘高校か．．．まあ合格できるようにならねばよ！」

「はい！」

「はっつい！」

「ハイ！」

俺、勇気、梓の順で、はい！と答えた。 . . . なんか、勇気だけちよつと違つが . . . .

「あゝずゝさゝちゃん！どっか行こうぜえ？」

「だめ！梓は勉強しないといけないんだから。」

「えゝ！私もどっか行きたいなあ？」

. . . そんな目でみんなよ . . . 断れねえじゃねえか！

「じゃあ、俺たちだけで行くか！なあ梓ちゃん？」

勇気は調子に乗って、梓の尻を触った。だが、梓はその手をはたき、みぞおちにパンチ。

勇気は「ぐおー!」といって苦しんでいる。

「じゃあ、俺たちだけで行くか？なあ、梓？」

「うん」

先に行こうとすると・・・

「ちょっとまってえ!」

勇気も追いつき、三人で並んで学校を出る。

「どこ行く？梓ちゃん？」

．．．おいおい勇気。俺には聞かねえのか？

「てか勉強は？」

「うっさい！」  
「うっさい！」

．．．ハモって言うなよ。

このままで梓は、桜ヶ丘高校に受かるのだろうか．．．？

## 第五話 進路決定！（後書き）

感想、アドバイスなどよろしく願います！

誤字、脱字などございましたら、ご報告よろしく願います！

## 第六話 模試！

．．前話のとおり、俺たちは桜ヶ丘高校を目指すことになった。

「拓也、国語わかんない．．。」

今俺は梓に勉強を教えている。

え？俺は勉強しなくていいのかって？

．．バカなこときくんじゃねえ。  
俺はて．ん．さ．いなんだよ！

なんだよ．．そんな目でみんなよ．．

なに？な、ナルシストおおおお！



ちがう！ナルシストじゃねえー！！

俺はナルシストじゃねえー！！

「……くち。……拓也。聞いてる？」

「おじー！き、聞いてるぞ？」

「……」

「……で、なんだっけ？」

「国語だよ！国語！教えてよ！」

「おう、そうだった。」

「で・・・どこだ？」

「ここー！」

「おう！ここか。・・・うておい、ここ一年の内容じゃねえか？」

「しょうがないじゃん。わかんないんだから・・・。」

「どうやら梓は、国語が苦手らしい・・・？」

「ほかの教科は、模試では八十点越えた。」

「どうだ？わかったか？」

「うん、わかった! ご飯!」

おい．．．最後変なの混じってたぞ．．．

「ご飯って何だ?」

「お腹すいたってこと!」

「はあ．．．わかった、作っとくから勉強な。」

「うん! よろしく」

梓はうちに来るときは、髪をツインテールにしておらず、髪を下ろし、日本人形みたいになっているけど、俺はそっちのほうが好みだ。

「ほら、できたぞ。きょうは麻婆豆腐マイポードウフな！」

「うわー！おいしー！！」

いただきます！といって、梓は麻婆豆腐を食べ始めた。

．．．これでもうちょっと胸があればいいのにな．．．

「た、拓也！どこみてんの??目線がエロイよ!！」

「し、ごめん!!--ちよつとな．．．」

「ちよつとって何?気にしてるからあんま見ないでね．．．?」

「う、うん。」

「じゃあ勉強するかな。拓也、後食べていいよ。」

いや後って・・・もうちょっとしかないじゃん・・・(泣)

「俺も勉強しないとなあ・・・」

ボソッとつぶやいたが梓には聞こえたらしく

「拓也勉強する？じゃあ、帰ろっかな・・・。とりあえず一人で勉強してみるよー！」

「おう、そうか。わかんないとこあったら、電話していいからな。」

うん、といい梓は帰っていった。

「勉強するとは言ったけど・・・寝ようかな・・・」

そのままベッドイン。

目覚ましもかけずに、寝てしまった・・・

「うわ、やべえ！遅刻だ・・・。模試なのに・・・」

時計は七時半を指している。

「しかたねえ……。飯はコンビニか。」

朝飯と昼飯を買い、学校へダッシュ!

「セーフ……!」

ぎりぎりで学校に着き、模試を受けた。

「梓どつだった?」

「うーん……。まあまあかな?」

「よかった・・・勇氣は？」

勇氣は・・・あれ？いない。さっきまでいたのに。

「拓也、足！」

「勇氣？何してんだよ。」

勇氣は真っ白になっていた・・・

模試は散々だったらしい。

・・・そして数日後



模試の結果・・・

拓也	国語	数学	社会	理科	英語	合計
	89点	75点	91点		82点	97点
	434点					

梓	国語	数学	社会	理科	英語	合計
	65点	80点	85点		89点	90点
	409点					

俺は基本的に良く、満足の結果だ。梓は国語以外は良く、この点数なら桜ヶ丘高校にいける。

「勇気は・・・?」

恐る恐る聞いてみる

すると勇氣は模試の紙を差し出した。

勇氣	国語	数学	社会	理科	英語	合計
	70点	50点	49点	39点	99点	
						307点

なぜか知らないが、英語だけは妙にいい。

「勇氣、どうしたんだ。理数はお前の得意教科だろ？」

「な、何か梓ちゃんのことばっかつ考えてて、勉強できなかった……」

「……教えようか？まあ、もちろんタダではないけどなあ〜！」

すると勇氣は、かばんの中からAVを取り出し、「これでどうだ？」と口づけてくる。

「いいだろう．．．じゃあ、明日から家こいよ．．．」

「なにしてんの、男同士で．．．。あつ！」

ヤバイ．．．見つかった！！

「たぐぐぐやぐぐ！！」

「ハイっっ！」

「昨日勉強するって言ったから家帰ったのに、こんなの見えたんだ．．．」

「そ、それは．．．ち、ちがうんだ！」

「没収!!」

「あゝあ! ドンマイ」

「勇気つげえ・・・!」

「てかアレおまえんだからな!

「じゃあ、勉強よろしく」

「・・・わかった」

まあAVがなくても、三人一緒に受かりたいからな・・・

「よし、じゃあ今日は勉強だな？」

「カラオケだろ！」

「いいね」

なんか、前にも似たことが・・・

「まあ、今日もいいか。」



## 第六話 模試！（後書き）

アドバイス、誤字等ございましたら、ご報告おねがいします！

## 第七話 猛勉強！

前話の通り、勇気のテストの点が悪かったので、今、勇気と梓に勉強を教えている。

「梓ちゃん！これつけてみて・・・？」

「にゃっ！？何これ！」

勇気を取り出したのは、俺のお宝のネコミミ。

キッチンの引き出しに隠してあったのに・・・

「なっ！勇気、何で隠した場所がわかったんだ？」

「お前のことは大体わかるぜ・・・たとえばなあ・・・その机の



裏！」

「そ、そこは・・・！」

手を伸ばすが、梓のほうが早く、机の裏に貼り付けてあったエロ本が、梓によって剥ぎ取られた。

その上、内容がヤバイ。

特集として“微乳美少女特集！”と書かれている。

「えっっ！拓也ロリコン？」

「ち、違う！ただそれは・・・」

「なに・・・？」

ヤバイ、梓が切れそうだ！何か言わなくては・・・！

「だからそれは・・・」

「拓也は梓ちゃんみたいのがタイプだからなあ〜！」

なっ・・・勇氣言いやがったな！

梓、顔を赤くすんな！

よく考えてみる！お前は、“微乳”って言われてんだぞ！

「ま、まあ、拓也も中学生だしね・・・」

そういつて、梓はエロ本を俺に差し出した。

「い、いいのか？」

「ま、まあ息抜きも必要だし・・・」

梓、その息抜きはどっちの意味だ・・・？

「発抜く・・・いやなんでもない。」

「あ、ありがとな。」

梓からエロ本を受け取ろうとした時、エロ本をとり損ねてしまった。

そして偶然、「女は巨乳が一番！」という見出しのページが広がった。

しかもそのページには、遠くから見てもわかるほど、かなり、折り目がついている。

「こ、これはな・・・その・・・」

「やっぱり、没収！」

あれ？あのページ見てないような・・・

あっ！そういえば、勇気が見てたページじゃねえか・・・！！

あの、クソやろう！

また俺は大切な工口本をなくした・・・

買いに行くの大変なんだぞっ！（泣）

「もういいよっ！勉強してやるっ！」

「おお〜！その息」

「俺も勉強しよっ・・・。」

なぜか知らないが、今日はみんなやる気を出し、かなり勉強がはかどった。

受験日まであと十一日。

ラストスパートだっ！

## 第八話 告白!?

「・・・うたく、なんで風邪引くんだよ・・・」

「ごめん・・・入試まであと何日だっけ・・・?」

「あと七日、一週間だよ。」

今は梓の家にいる。

今日の朝、梓のお母さんから、「梓熱出しちゃって・・・拓也くん面倒見てくれない?今日はちょっと用事があって・・・」といわれたので、今面倒を見ている。

梓の家に入るのは二回目だが(一回目は工口本を取り返すために入った。)梓の部屋に入るのは、初めてだ。

梓の部屋には、女の子らしいものはなく、ギターとレコードと机だけが置いてある。

「梓、ギター弾くのか？」

「うん．．．ちょっとね．．．ゴホッ、ゴホッ！」

「おいおい、無理すんなよ．．．？」

「うん．．．だいじょうぶ」。

「今は十一時か．．．飯作るつか？必要なもんかってくるけど．．．」

「えっ？でもお金ないよ．．．」



「今日は俺のおごりだ。何がいい？」

「うん．．．チャーハンがいいかな．．．？」

「チャーハンか．．．もつと豪華なでもいいんだぞ？」

「うん．．．でもやっぱりチャーハンがいいかな．．．。」

「わかった、チャーハンな。家にある材料で作れるから、ちょっと家にとりに行ってくるわ」

「うん．．．わかった」

家に材料をとりに行き、梓の家のキッチンでチャーハンを作り始め

る。

．．十五分後、チャーハンができたので、梓を呼びに行くことにする。

「あゝずさっ？できたぞ〜。」

「なんだ．．寝てんのか．．」

あたりまえか．．とつぶやき、梓のベットに腰をかける。

「ほんっとかawaiiよな．．猫みてえ．．」

寝ている梓のほほに触れる。

「・・・っー」

触れた瞬間、頭が痛む。

それと同時にわかったことがあった。

「俺は・・・俺は、梓が・・・好きなのか・・・？」

詳しくはわからない。確かめるため、もう一度梓のほほに触れる。

今度は頭ではなく、胸が痛みだした。

「そうか、好きなんだな・・・梓のことが・・・」

そうとわかると、なぜか知らないが、急に梓を抱きしめたくなる。

手を伸ばそうとする・・・いやっ！やめておけ！このまま手を伸ばすと、ただのロリコン野郎だぞ！！

でも・・・一度だけならいいよな・・・

寝ている梓の横に寝て、梓を抱きしめてみる。

「な、何してるの！？拓也！」

「なあ、梓・・・俺のことどう思うっ？」

「どう思うって・・・」

「恋愛対象として・・・だよ」

梓を抱きしめながら、俺はそのまま話続ける。

「好き・・・みたいなんだ・・・梓のことが・・・」

そういうと、梓は本気でパンチ！

「いってえなあー！なにすんだよ！」

「また熱上がっちゃっじゃん！！そ、その、答えは今度ね・・・？」

「・・・わかった、ゆっくり考えてくれよ?」

「うん、それよりチャーハン!」

「はいはい。」

「・・・何かその場のノリで告っちゃったけど、いつ答えは返ってくるんだろつか・・・?」

## 第九話 うつされた… (前書き)

最初は梓 side で書いてみます。

はじめて、side.ver で書くので、読みにくいかもしれませんが、よろしくお願いします。

第九話 うつされた…

「ごめんね？何か風邪うつしちゃって…」

「いや…俺が悪いんだ…手洗わなかったから…」

「何で洗わなか…うつん！なんでもない！」

梓は何で洗わなかったのか察したようだ。

大体の人はわかると思うが、梓をそ、その…だ、抱きしめた手を、洗いたくなかった…

え…？キ、キモイだと？！

普通じゃねえか…だって…その…やっぱ、洗いたくないじゃん？



え？理由になつてない？？

．．．まあ．．．洗いたくなかつたんだよ．．．

わかつてくれー！！

「拓也、大丈夫？何か、息荒いよ？」

「な、何でもねえ．．．大丈夫だ。それより、勉強大丈夫か？」

「大丈夫．．．じゃないかも．．．。ここで勉強していい？」

「いいぞ、わかんなかったら教えてやる・・・ゴホッ!」

「大丈夫?無理しないでいいからね・・・?」

「だいじょぶだ・・・それよりマスクもってこいよ・・・」

「うん。」

拓也 side

梓が勉強を始めてから十分間、何も会話がされていない。

そっぴや、さっきまでの態度だと、告ったこときにしてねえみてえ

だな・・・

そんなことを思っているうちに俺は寝てしまった・・・

梓  
s i d e

拓也寝たのかな・・・

寝息が聞こえる・・・

私は拓也に告白されてとき、正直、うれしかった。

けど・・・私には、好きな人がいる・・・

それは、拓也の親友。

それでいて、チャラ男だけど・・・

でも、私は、二年のころからあの人が好きだった・・・

勇氣くんのが・・・

何か知らないけど、涙が出てきた。

拓也がいるのに・・・

「おゝい！！勉強してんのか．．．」

「え！拓也、起きたの？」

梓は、必死に顔を隠そうとしている。

「泣いてんのか．．．？」

「もしかして．．．アレのことか？そんな悩まなくなっただっていいんだぜ。ぶっつけてくれてもいいぞ？ほれ、ティッシュ」

「拓也は・・・拓也は優しいね・・・」

「何いってんだ、お前が思ってるほど、俺は優しくないよ。」

そういつて拓也は、背中を軽くたたいた。

「・・・好きな女に、泣いてほしくねえしな・・・」

拓也は照れたようにしていった。

「ありがとう・・・たく・・・」

「拓也!?!?」

「わ、悪い、梓・・・熱あんの忘れてたわ・・・」

「もう！心配させないでよね！」

「しめん・・・」

拓也は泣きそつな顔をする。

何で拓也は男のくせに、泣き虫なんだろう・・・

「もうっ！泣かないで寝るっ！」

「うん・・・おやすみ・・・」

「おやすみ。」

・・・拓也と勇気くん、私はどっちが好きなんだろ・・・？

なにかごちゃごちゃした気持ち、心の中に広がる。

このままだと泣いてしまいそうだ。

私は必死に涙をこらえた。





## 第十話 入試前日！

「・・・鉛筆は持ったか！」

「うん！」

「シャープペンじゃ・・・」

「ダメ！」

「ダメ！」

「まじで！ねえよ！買いにいかねえと・・・もちろん、拓也、梓ちゃん、ついてきてくれるよね・・・？」

「一人で行って来い！」

「一人で行ってきな？」

「うう……ひどいよ……ハモって言わないでよ……うええーん！」

……やめろ、勇氣……嘘泣きは、すげえきらいぞ……

「梓、そっちの手もって。」

「うん……わかった。」

「え……何すんの??」

「せーの……」

「うぎゃー！やめろお！」

俺と梓は、協力して、勇気を外に出した。

「鉛筆を持ってない奴に、うちの敷居をまたぐ資格はない！」

ガチャン

かぎを閉めた。

そして俺は

「もうかえってくんな！」

といい、勇気を強制的に排除。

そして、勇気を排除したのは、理由があった。

鉛筆を買いに行かせることは、もちろんだが、もうひとつある。

それは、梓に本当のことを聞くこと。

最近気づいたんだが、梓はどうも、勇気といるとおかしい。

おかしいというのは、態度ではなく、話すことをためらうことだ。

さっき、俺が梓に「そっちの手もって」といった時に、ちょっとの沈黙があった。

俺が思うに、これは、“好きな勇気の腕に触るのにためらっている”  
”としか思えない。

「た、拓也？どうしたの？なんか、顔色悪いよ・・・？」

「・・・なあ、梓。ひとつ聞いていいか・・・？」

「な、何・・・？」

「梓、おまえ・・・もしかして、勇気のこと好きなのか・・・？」

「な、なんで？そ、そんなことより、勉強しようよ！ねっ？」

今の梓の発した言葉で、大体わかった。

慌てているうえに、話題を変えようとしている。

．．．ここで一気に踏み込むと．．．梓は多分落ちるだろう。

なぜこんなことがわかるのか、自分でもわからない。

だが、俺の筋肉が、皮膚が、骨が、梓と約三ヶ月すごした体が、そういつているのだ。

間違いは．．．ない。

「なあ、梓、教えてくれよ。このままだと、なんかおかしくなっちゃまいそうだ。．．．告白の返事を待つ奴の気持ちも考えてくれ。」

梓の手を握る力が強くなる。

「・・・じゃあさ、私の気持ちにもなってみてよ・・・」

「はぁ？どつゆっ」

「私だって悩んでるの！拓也のことは、嫌いじゃない・・・ううん、むしろ好きなほうなの！でも・・・でもでも、私にだって好きな人がいるの！」

そう聞いた瞬間、俺は手を離れた。

そして

「・・・その好きな人ってのは、勇気か・・・？」  
・・・聞いた。聞いてしまった。



こんなことを聞くのは、すごく残酷なことだと思っている。

自分でも、なんてひどい男だろう、と思う。

その瞬間、梓は顔をしかめ

「っ——

」

泣き出した。

「あ、梓！」

ボタン——！

ガチャ

「おい、梓ちゃん今出て行ったけど……なんかあったの」

ボタン！！

ガチャン！！

気づいたときには、ドアを閉めていた。

梓が好きらしいやつ顔を、見たくは無かった。

いや、見れなかった。

「おい？拓也？」

「・・・悪い。今日はもう帰ってくれねえか・・・？」

「拓也、エロ本かってきてんだぜ???よまねえのか?」

「今度でいい・・・とりあえず帰ってくれ・・・」

「おい、拓也!お前おかしいぞ?梓ちゃんも出て行ったし・・・」

「いいから帰れよ!!--」

ひどく鋭く、強い声でそういった。

自分でも、こんな声がでるなんて思わなかった。

「・・・わかった。勉強しとけよ・・・」

そっさい、勇気は帰った。

その日、俺は勉強もせず眠った。

入試のことなど忘れて・・・

今すぐ現実から逃げたかった。

梓が、俺の親友、“勇気”を好きだということを知り、忘れたかった



第十一話 前編 俺の想い、そして答え

「くそっ！寝れねえよ・・・」

時刻は十一時。

梓と口論になってから、一時間ほど寝たが、その後は眠れずにいる。

「今思えば、なんか悪いこといったかな・・・？勇気のことが好きか聞いたただけだったぞ・・・」

誰かに相談したいと思い、最近買い換えたスライド式の携帯を枕元からとる。

「誰に相談すればいいんだ・・・？」

勇気には相談できるはずもなく、ほかの友達は、携帯などもっていない。

持っているやつもいるが、そいつらはただのヲタク仲間で、（ちなみに俺もヲタクだ）外見からして、恋をしたことの無いようなやつばかりだ。

「・・・あえてここで、梓に送ってみるか・・・？」

俺の予想では、梓も同じように悩んでいる・・・と思う。

さっき、「拓也のことは嫌いじゃない・・・ううん、好きなほう！！」とかいていたので、悩んでいるに違いないと思う。

「一人で悩んでも仕方ないしな・・・」

アドレス帳から梓の名前を選び、文を作ろうとする。

「・・・なんて打てばいいんだ？」

当然、文は思い浮かばない。

「・・・無理だ。やめとこう。ここで送ったら失礼じゃねえか・・・」  
「？」

いちおう、今までは梓のことを誰よりもわかっていると思った。

いや、わかっていると思いたかった。

梓を自分だけのものにしたくて、そう思い込んでいた。

でも、今は違う。



わかっていないから、こうなったのだ。

「そっぴや飯食ってなかつたな．．．」

ベットから出て、キッチンに行き、お湯を沸かす。

カップラーメンはあまり好きではないが、今日は料理を作りたいくない。

「いつもは、こんなにこの部屋がこんなに広く思わなかったのにな．．．」

がらん、とした2LDKの部屋を見わたす。

「何でだろう．．．？」

そう思ったとき、ふと梓の顔が浮かんだ。

「そうか．．．梓がないからか．．．」

口論になる前は、この時間には梓がいた。

二人で楽しく、他愛も無い話をしていたときのことが思い浮かぶ。

たまに、そこに勇気がいて、三人で、家族のようにしゃべっていたことが、走馬灯のように、頭の中を駆けめぐる。

「．．．っー」

目は次第に熱くなり、水がこぼれる

これが涙だと気づくには、時間がかかった。

ああ・・・俺、寂しいんだ、そう気づくのに、かなりの時間を要した。

俺は昨日まで一人じゃなかった。

梓がいた。勇気がいた。

今家族がない俺にとっては、あの二人は、間違いなく、“家族”だった。

そして、わかったことがあった。

俺が梓に思った“好き”は、多分、“家族”として好きだと思った

ってことだ。

今は梓と一緒にいたい。

問・・・夏季拓也は、どうするべきか？

答・・・そんなの簡単だ。

俺は、俺が思ったことをやる。

あいつに、たった今わかった、新しい思いを伝える。

ガスを止め、寝室へダッシュで向かう。

することは、梓への電話。

携帯をスライドし、梓の番号へコールする。

「もしもし・・・?」

「な、何・・・拓也・・・」

泣いている声だ。

好きな女は、どんな理由でも絶対に泣かさない。

そして、家族も泣かしてはいけない。

「泣くな！泣き止め！！好きな女は、絶対に泣かしちゃいけないんだ！！」

かなりの声で怒鳴り、俺はそのまま話し続ける。

「俺はお前が好きだ！けど、さっき、違う意味で好きだって気づいたんだ！」

「どっゆっ……っ……っ？」

「お前は、ずっと俺のそばにいてくれた。家族みたいに」

言葉が途切れる。でも、伝えなくちゃいけない。

「俺はお前を泣かせねえ！！絶対に！」

「……」

「梓、どうした？」

「ほんっとにやさしいね！何か泣いてたのバカらしくなっちゃった。」

電話越しで、笑い声が聞こえる。

「そっか。よかった……。もう泣くんじゃねえぞ？」

「うん。」

「じゃあ、明日、七時に家な！勇気と一緒に行くっ？」

「.....」

沈黙が.....あっっ！そういや、勇気のことは禁句じゃねえか！

「わかった！いくね！おやすみ」

「おっ！」

電話をきり、ガッツポーズ！

よし、俺よくやった！と・・・

今日（今は一時）の入試がんばるぞ！！

そう思い、ベットへと体をつづめた。





第十一話 後編 君の優しさ・・・(前書き)

## 第十一話 後編 君の優しさ・・・

「・・・お腹減ったなあ・・・そういえば、お母さんから、拓也から作ってもらえて言ってたもんな・・・」

時刻は、十二時。

今日は寝ていない。

もちろん、拓也のことについてだ。

「なのであの時、泣いちゃったんだろう・・・」

寝返りをうち、携帯の画面を見る。

そこには、待ち受けに設定してある、拓也、勇気くん、私が肩を組んで笑っている。

．．．これはいつ撮ったのだったかな？

確かあの時は、勉強しようとして、拓也の家に行ったときだったと思う。

「何か二人と会いたいな．．．」

だけど、会えるわけが無い。

時間も時間だが、やっぱり口論になったことを気にしているからだ。

写真だけでも．．．と思い、写真のフォルダを開く。

どの写真を見ても、三人は本気の顔をしている。

本気で笑ってる顔、本気で勉強している顔、そのほかに、いろんな本気があった。

「・・・なにこれ??」

その写真に写っているのは、拓也と私が、隣で寝ているところだった。

「勇気くんかな・・・」

人の携帯で勝手に撮るなよ! そう思う前に、拓也が引っ越してきて、拓也の家に泊まったことを思い出した。

いきなり「泊めて!」といってきた私を受け入れてくれた拓也。

本当に優しい人だと思う。

でも、確かあの時拓也は、こっちを向かないで、反対側を向いていたと思う。

そのとき、拓也って本当に優しいな・・・って心から思った。

今思うと、拓也が引っ越してきてから、すごく刺激的な毎日だったと思う。

エロ本を見たのも初めてだったし。

思い出し笑いをしてしまう。

ツーン・・・と目からしずくが落ちた。

自分自身、何で泣いているかわからない。

だって今は、笑っていたのに。

でも、涙は止まらない。

泣いてるとこ、拓也が見てたら、なんていうかな・・・？

きつと、慰めてくれる。

『梓、泣くな！！』って・・・

だけど今、拓也はいない。

こんな広いのに、私しかいない。

どうしても、拓也に会いたい。

携帯のフリップを開き、アドレス帳から、拓也の名前を探す。

けど、涙のせいで、携帯の画面がにじんで見えない。

「た・・・く・・・や。・・・拓也あー！！」

叫んでみる。けどきつと、拓也には聞こえないだろう。

今は、拓也と会うかわりに、どんなものをくれると言われても、絶  
対に拓也と会うことを望む。

君に・・・優しい君にあいたい・・・



会わなくてもいい。声が聞きたい。

「．．．ん．．．」

携帯が鳴り出す。

涙を拭き、携帯のディスプレイを見る。

拓也だ．．．話したい。けど、泣いているところを見せたくはない。

そう思っているのに、体が勝手に、携帯を取る。

『もしもし．．．？』

「な、何．．．拓也．．．」

聞きたかった。拓也の声・・・

『泣くな！泣き止め！好きな女は、絶対に泣かしちゃいけないだ  
！！』

・・・驚いた。

ここまで、泣くなと、私を心配してくれると思わなかった。

よく考えれば、私が悪い。

なのに拓也は・・・

『俺はお前が好きだ！けど、さっき、違う意味で好きだって気づい

「たんだ！」

思ったことを、そのまま口に出す。

「……じゅんじゅん……」

『お前は、ずっと俺のそばにいてくれた。家族みたいに』

たしかにそうだった。

理由も無いのに、勝手に家に言って、ご飯を食べて、帰っていった。

本当にその“家族”という表現がぴったりだった。

『俺はお前を泣かせねえ！！絶対に！！』

ほんとにやさしいな・・・

うれしくて言葉が出ない

「……………」

『梓、どうした？』

その時、不意に涙が止まった。

・・・拓也の優しさのおかげかな・・・？

「ほんっつとにやさしいね！何か泣いてたのバカらしくなっちゃった！」

本当は、バカらしくなったわけではなくて、安心したからだ。

そして、自分が安心する前に、拓也を安心させたかった。

『そっか！よかった．．．！もう泣くんじゃねえぞ？』

拓也の口調は強いが、優しさがあったわってくる。

「うん！」

精一杯の声で、そう答えた。

『じゃあ、明日、七時に家な。勇気と一緒に行くっ？』

「．．．．．」

聞いた瞬間、ちょっと拓也に失望・・・

普通いづかな・・・？

自然に黙ってしまった。

でも、心配はさせたくないから。

「わかった！いくね！おやすみ」  
そう答えた。

『おじ！』

電話を切る。

そして、急に睡魔が・・・

安心したからだろうか・・・？

多分そうだろう。

そして、ふと思った。

拓也は私の心の支えなんだって・・・

・・・君がいたから、笑えたんだね！

そう思った。

記憶はそこまで・・・

寝てしまったようだった・・・

布団もかけずに・・・



## 第十二話 入試当日！

「ふあゝ．．．眠い．．．」

あの後すぐ寝たが、また一時間後に、腹が減っておきた。

そのあとは．．．目が覚めて眠れなかった。

ということで、俺は実質、二時間ぐらいいしか寝ていない。

「入試か．．．大丈夫かな．．．？」

「大丈夫だよ！」

「うおー！いつからそんなに！」

「ん〜とね．．．今．．．？」

「．．．お前はいつから、不法侵入の手口をおぼえたんだ．．．？」

「ドアかぎ開いてたよ？」

「え．．．！マジ？」

ああ．．．そうだった。いつでも梓の家にいけるように、開けたんだった。

「そついえば．．．ゆ、勇氣くん遅いね．．．」

．．．やっぱりためらってるか。

普通だよな．．．

まあとりあえず今は、勇気を待つしかない．．．そ、そうだった！電  
話すんの忘れてた．．．

「どじしよじ」  
「．．．どじしよじ」

「え．．．？」  
「」

「勇気に連絡すんの忘れてた．．．！」  
「」

「え〜！どじするの？」  
「」

「仕方ないから．．．入試会場で合流ってことで．．．」  
「」

「そつだね．．．」  
「」

「はあ・・・」

同タイミングでため息をついた。

・・・ほんとに家族みたいだな。

「拓也、今ほんとに家族みたいって思わなかった？」

「え・・・口に出てたか？」

「ううん、私もそう思ったから、拓也も思ってるかなって・・・？」

「はは、なんだよ、それ。」

「何だろうね？」

「まあ、とりあえず、勇気にメールっと」

内容は

『昨日は悪かった>(一一)<

入試会場の入り口で待ってるから、こいよ!!--』  
そう書いて送信。

携帯をスライドさせ、ポケットにしまう。

「よし、じゃあ行くか。」

家から入試会場までは、歩きで10分。

行くまでの時間は短いが、その間に梓に聞きたいことを聞くつもりだ。

．．多分聞けないけど。

「なあ、梓」

「なに？」

「いや．．．なんでもねえ。」

「何？言ってるよ。」

「ここで、『昨日はごめんね』と言ったら梓は泣くだろう。」

でもなんかここで話をしないと、キレると思うからな．．．

あえてここで、エロイことを聞くか・・・

「聞いていいのか・・・？エロイことだぞ・・・！」

俺は梓の胸を見ながら言う。

「な、何言ってるの・・・？み、見ないで！」

そういわれても、俺はじっと梓の胸を見ている。

「セクハラだよ！」

ぐっ・・・そういわれたら仕方ねえ・・・

そんなことをしているうちに、もう入試会場。

勇気が手を振っている。

「時間ねえぞー！急げー！」

「おう、分かった。」

「えーっと、俺はこの部屋……だな。お互いがんばるっぜー！」

「おうー！」

「おうー！」



．．．やっと終わった。

俺的には、すべて簡単だったが、二人はどうだったろう？

勇気は燃え尽きているが、白くはなっていないから大丈夫そうだ。

梓は．．．顔が赤い。

勇気の隣だから照れてんだな．．．

照れる余裕があるから、大丈夫だったのだろう。

「勇気、カラオケ行くか？」

燃え尽きて灰色になっている勇氣に話しかける。

「おう  
」

つぶれそうな声で、そうつぶやいた。

「梓は？」

「私も行くのかな。」

そういって三人は、疲れた体を引きずって、カラオケへと向かった。



第十三話 ……結果は???

「……よし、見るぞ。」

「うん」

「おう」

今は合格発表を見に来ている。

勇気はもう、なんていうか……その……死にそうな顔をしてい  
る。

「「「「せーの!」「」」」」

一気に後ろを振り向き、自分の番号を探す。

「136、136・・・あっ！」

「102、102・・・よし！」

「.....」

「勇気・・・？ま、まさか！」

勇気の番号を探す。

「142、142・・・なあーんだ、あるじゃねえか・・・おい、  
勇気？」

勇気は泣いていた。

すみません・・・笑っちゃいました

こいつが泣いてるの、初めて見たんで……

「……何で泣いてんだ？」

知ってるけど、わざと聞いてみる。

「よかった……受かったぞ！」

周りの人が、いっせいにこっちを向く。

「バ、バカ！行くぞ……あ、すみません……」

勇気を引っ張っていたら、誰かにぶつかった。

おお・・・!!で、でかいぞ!!(胸が・・・)

「すみません・・・えっ!」

「こんにちわ・・・お名前は・・・?」

勇気復活!!それと同時に、ナンパスタート!

「え・・・平沢憂ひらさわゆうですけど・・・」

そういわれると、勇気はポケットから自分の携帯を取り出し、赤外線  
線の交渉中・・・

「ハア・・・相変わらずだな・・・そっさいや、梓は?」

周りを見渡しても、梓はいない。

まあ、いなくてよかったが。(多分泣くんじゃね・・・?)

「勇気、ちょっと俺粹を・・・」

「憂さん・・・うるさいやつがいるので、あそこ」のマップで話でも  
「・・・」

そういつて勇気は、ハンバーガー店を指差す。

「・・・もういいや。おらっ」

勇気のケツに、思いっきりキック。

「じゃあな〜！また明日〜」



すると勇氣は

「憂さんがかわいいから、あいつややきもちやいてんすよ・・・」  
などといっている。

・・・かわいいとは思っけどな、俺は断然梓のほづが好みだけどな。

そんなことより、梓を探さなくてはならない。

「あゝずさゝ！どこだ・・・あつ、  
あんなところに・・・」

梓は、人ごみに埋もれている。

「おらっ」

人ごみの中から、梓を引っ張り出す。

「ふう〜・・・疲れた〜！あれ・・・？勇氣くんは？もしかして・・・」

「ああ、多分そのもしかして、であってる。ナンパ中だ・・・」

やべっ！禁句じゃん・・・！

「そっか・・・私たちもどっかいく？」

「どこ行くんだ・・・？」

「うんとね・・・」

．．．なんでよりによってここなんすか．．．梓さん．．．

「ん．．．？なんかいった？」

「い、いや、なんでもねえよ！」

ここってのは、なんていうか．．．大型スーパーの服が売ってる  
ところ．．．だ

何でここがまずいかというと．．．ここは、アニメ好きなら、誰で  
も知っているであろう、アニメイトがとなりだからだ．．．

別にいいじゃん．．．と思うかもしれないが、実は昨日、ヲタク仲  
間から、誘いのメールが来ていた。

ということとは・・・あいつらと接触する可能性があるからだ・・・

断ったが、ここに女子（しかも外見はロリだ・・・）といるところをみつけたら、何をされるかわからない・・・

「拓也・・・？なんか顔色悪いよ・・・？帰る？」

・・・梓さん、それを待ってましたよ！

「お、おう・・・わるいな。ちょっと緊張して眠れなかったんだ・・・」

本当は十時間以上寝ているが・・・

「大丈夫？歩ける？」

「大丈夫だ・・・とりあえず帰ろう・・・」

わざと具合の悪そうな声を出し、早く帰ろうとせかした・・・

「わかった。じゃあ、帰ろうか！」

・・・あなたの優しさに、涙が出そうです・・・

「11111111111？」

「おう、悪かったな・・・」

「じゃあお大事に。」

「おう・・・。」

家に入り、深いため息が出た。

「疲れた・・・寝よ。」

・・・起きると、メールが何十件っ！

ヲタク仲間かと思ったら、全部梓で、ずっと心配してくれてたようだ。

．．．このとき、拓也が梓を本当に好きになってしまったのは、この世界の誰一人、拓也でさえも知らない．．．

今日はまだ．．．誰一人．．．

## 第十四話 温泉旅行？

合格発表から3日後、もう何もしなくてもいいので、梓と「どっか行こう！」「とって計画を練っている。

「勇気はないのだった？」

「どうも、憂さんとデートらしい……自分で言っていたから、本当かわからない。」

「拓也、どこ行くの？」

「うーん……そうだな……」

「ここは泊まりでどっか行こう！」とか言ってもいいんだろうか……



まあ、言って悪いことは無いから、言ってみることにする。

「どっかにさ、と、泊まるってのは、どうだ？」

梓は黙り込む・・・

あれ・・・？やっぱりばかだったか・・・

「変なことしないならいいけど・・・どこ行くの？」

予想外の展開！だが、どこ行こうかなど考えてもいない。

「うーん・・・そうだな。温泉・・・とか？」

「・・・」

やべっ！下心丸見えじゃねえか・・・！！

・・・何か最近、空気読めてねえな。

前は話すの結構つまかったのにつ！！

「・・・いいよ。どこの温泉？」

やっぱりそうだよね・・・っていいのよ？！

ノリで言ってみるか・・・

「そりゃあもちろん、混浴・・・ぐふっ！ー！」

「・・・拓也、エロ禁止!！」

「じゃ、じゃあ、部屋に温泉がついてるところは・・・?」

「それなら・・・いいかな?」

「いいのよー」。

・・・かなりの時間一緒にいるが、梓の考えはよくわからない。

混浴と、部屋に温泉ついてんの、いっしょじゃね!？」

「違う!！」

混浴はしらねえやつに、裸を見られちまうけど、部屋についてんの

は・・・俺だけが見れる・・・

「よ、よし！さっさと行くとこ決めちまおうぜ！ほ、ほら、ここな  
んかどうだ？」

超高速で、スマートフォンのアプリを開き、温泉の画像を見せる。

ちなみにこのスマートフォンは、昨日買ったやつで、いままでのス  
ライド式の携帯も持っている。

要するに、二本持ちだ。（俺はアニヲタでもあるが、家電ヲタクで  
もある。）

「え〜？高くない？」

スマートフォンの画面を見ながら言う。

「そうか？」

俺自身、画面をあまりよく見ていない。

「どれどれ」

画面を見てみると、1泊2日で200000円！！

さすがにこれは高い・・・

ん・・・？このプランなら、行けんじゃねえの？

「梓、このプランはどつだ？」

そのプランには、“カップル限定サービス！部屋代四割引！”と書かれている。

「カップルではねえけど・・・よくね？」

「いいけど・・・これでも、こんなお金持っていないよ？交通費もあるし・・・」

泊まるうとしているところは、新潟県内だが、上越というところで、多少の金はかかる。

「まかしとけ。今回は、交通費と部屋代半分おごってやるよ。」

「ほんとに？お金大丈夫なの？」

「親父からもらってるからな。余裕だ。」

「わかった。じゃあ必要なもの買いに行こう？」

「おう、いいぜ。万代か？」

万代というのは、新潟の中心部みたいなもんだ。

「うん！」

バスで二十分ぐらいかけて、万代に到着・・・したわい  
いものの、何を買いかわからない。

「梓．．．？何買いにきたんだっけ？」

「タオルとか．．．かな？」

「よし、じゃあ行くか。」

伊丹に入り、タオル売り場を見つけ、買うまでに十分しかかからなかった。

「．．．何する、この後？」

梓を見てるつもりだが、不意に胸に目がいつてしまう。

「あんま見ないでよ！セクハ．．．もごっ！」

．．．今回は、作者が止めさせていただきました．．．



「わりわり！じゃあ・・・帰るか？」

「そうだね！やることもないし・・・てかさっきの人誰？」

「・・・聞かないであげてくれ。たぶん作者だ・・・」

「ふーん・・・セクハラに敏感なんだ・・・」

グサっっ！！

「なんかすごい音しなかったか？」

拓也君・・・そこは気にしないでくれ・・・

「ソラミミか・・・よし、帰るか。」

また二十分で家に着き、梓と家の前で別れた。

旅行は明後日。

楽しみだなあ

第十五話 温泉旅行・・・1

「ううう・・・春って言っても、まだ寒いな・・・」

「なんかもってくればよかったのに・・・これ使う？」

梓は自分の首に巻いているマフラーをとろうとする。

「いいよ、大丈夫！梓には風邪引いてほしくないしな。」

俺は悪戯いたずらっぽい顔で、笑う。

今は駅。

時間は午前12時。

昼近くになっても晴れる様子はなく、駅のホームに冷たい風が入ってくる。

そして俺と梓の手には、ちょっと大きめのキャリーバック。

そう、今日は梓と温泉だ・・・

な、なに！？別にエロイことを考えてるわけじゃねえぞ！

でも、期待はしてるんだ・・・

もしかしたら今日が、俺の童 卒業日かもしれねえからな・・・

「拓也・・・？何でにやついてんの？」

「な、なんでもねえ！ほら、電車きたみてえだぞ？」

上越新幹線でいこうと思ったが、金銭的な問題で（さすがに新幹線に乗ると、金がなくなってしまう）普通の電車や、バスを乗り継いでいくことにした。

「暇だな・・・何かするか？」

「なんかって何すんの？」

「そりゃあ、もちろん、一緒に風呂を・・・いだっ！」

梓は俺のすねを思いつきりキック。

「何いいたいか丸見えだよ・・・」

「なっ！男だったら健全だぞ！」

「そうなの？男子とあんまエロい話したこと無いからなあ・・・」

「なら、今してみ・・・ぐはっ!」

今度は腹だ・・・

どちらかというと、みぞおちに近い・・・

「・・・で、結局、風呂は入ってくれんのか？」

「拓也、本気でいってるの?？」

「うん。本気!」

「うん．．．」

まあ、普通だろ。

ためらわなかったら、逆におかしいからな．．．！

「わかった！タオル巻いてなら．．．どうだ？」

「それなら．．．いいかな？」

おおー！！

さすが梓．．．これで俺は、また男の夢を達成できた．．．

また、というのは、最初は女を家に泊めたこと。



次は、女の寝顔を見たことだ・・・

「拓也・・・？よだれでてるよ？？」

「お、おう！ー！わりい・・・ごめん、ありがとう。」

梓からティッシュをもらい、よだれをふき取る。

・・・別に梓を食べようとしてたわけじゃねえからな！

え・・・？わかりやすすぎるって？？

でも、男の夢でしょ？（拓也と作者はそう思ってます！）

「あっ！拓也、雪！！！」

どうやら、トンネルをねけたらしく、窓の外には、雪が張り付いて消えていく。

こういうのを、名残雪というのだろうか・・・？

「おし！梓、降りるぞ！」

「えっ、もう駅？」

「なんかあっという間一時間たちまったな・・・」

キャリアバックをもち、二人そろって駅のホーム降りる。

「じゃあ、このバスで三十分、それから歩いて五分で到着だ。」

そっぴいなから、不意に梓のほづを見る。

「・・・キャリアバックもとうか？」

「じめん・・・持つてくれる??」

「いいよ、ほら、かせよ。」

\*\*\*

それから三十分たち、温泉に着いた。

「うおっ！いいとこだな・・・」

部屋に入り、中を確認しておどろいた。

一言で言うと、ハンパない。

窓からは木々が雪で白く染まっているのが見える。

部屋自体の広さは、8畳・・・くらいか？

そのほかに、トイレはもちろん、期待していた露天風呂もある！

「今は・・・3時だね・・・何する？」

「じゃあ、さっそく布団をしいて・・・」

おいおい・・・そんな目でにらむなよ・・・

「うそだよ！冗談！」

そういって、梓は目をいつもの目に戻した。

「・・・で、何すんの？」

「じゃあ・・・とりあえず、この旅館回ってみるか！」

「そうだね。」

旅館を回ってみて、俺は驚愕した・・・

とにかく、内装がヤバイ。

和洋折衷だったか・・・？まさにそんな感じだ。

「拓也、もう五時半だから戻ったほうがいいんじゃない？」

「おう！そんな時間か・・・」

この旅館は、多分東京ドームくらいあるんじゃないか？

部屋に戻ると、女将？が二人いて、その手元には料理があり、かなり豪華だ。

「では、しゅっくへりお過ししてください〜」

と行って、二人は出て行った。

「う、うまい。どっやって作るんだ・・・」

俺は、豚の角煮を見てつぶやく。

「バターか・・・いや、もしかして「ニロニロたんぱくを」」

「食べないの？もらっつよ」

「あっ！おい！」

梓は俺の最後の角煮をくった・・・

半ば強引に・・・

「おい、ちょっと！」

俺は梓の体を軽く押さえつけた・・・

「」  
「」

・・・二人の間に沈黙が流れる。

なぜかというところ、この体勢は、アレをやる時の体勢に似ているのだ。  
・・・

いや、もうその体勢で完璧だろう。



「わ、わるい・・・」

「う、ううん！・・もともとは私が悪いんだから・・・」

しばらく沈黙のまま、飯を食べ、風呂の時間・・・（俺がいつも入っている時間ってことだ）

第十六話 温泉旅行・・・2

カチっカチっ

・・・時計の針が動く音が聞こえるほど、静かだ。

時刻は午後七時。

梓と風呂に入りたいが（まだ、入れるかどうかはわからない）そんな雰囲気ではない。

っていうか、もう風呂なんてどうでもいいかもしれない。

梓が笑わないほど、寂しいことはないからな。

「な、なあ、梓！」

「な、なに？」

「い、いや、その……」

とりあえず、沈黙をきつたが、何を話せばいいかわからない。

「あのよ……生きてて楽しいか??」

おーい！俺何いってんだよ！

なんで、せつかくの旅行に、こんなシリアスな話題なんだ……！

「う、うん……拓也は楽しいの?」

「俺か!?俺は……?」

俺は、何だ?

たしかに生きてて楽しいが、何で楽しいかわからない。

「俺は・・・生きてて楽しいけど、何が楽しいかわからないわ・・・」

「そっか、そうだよね！私にもわかんないや。」

梓は小さく笑う。

そのとき、俺は気づいた・・・様な気がした。

この笑顔があったから、俺は楽しかったんじゃないか・・・と。

確かに、梓と会う前も、十分に楽しかった。

だけど、何か足りなかった。

彼女はほしかったが、そういうものではなく、何か足りなかった。

何かというのは、良くわからないが多分、“梓”という存在の中にある、何かだと思う。

梓は、俺の心の足りなかったところに、すっぽりと収まってくれたのだ。

「俺は、さあ・・・」

ゆっくりと話し始める。

「“楽しい”ってのは、“充実してる”ってことだろ？」

要するに、“リア充”だ。

「俺は多分、自分の生活が充実してるから、楽しいって思うんだ。」

「どーゆーこと?」

「つまり、梓のおかげで、充実してると思うんだ。」

カーッと梓の顔が赤くなる。

「今までも楽しかったんだけど・・・梓がいてから、さらに楽しくなったと思うんだ。」

．．．また、沈黙が始まる。

俺はこれ以上話すことが無い。

俺はゆらっと立ち上がり、梓の体をお姫様だっこで持ち上げる。

「え、ええ？なに？？」

俺はなににも答えずに、梓を風呂場へと運んだ。

そして、風呂の前で梓をおろし。

「いいか、俺は今から1時間ほど、秘密の散歩に出かける。」

梓は、なにいつてるの？みたいな顔で俺を見上げる。

「絶対に、俺のことを追いかけるな。いいな？」

なにがなんだかよく意味が分かっていないようだったが、こくこくと頷いた。

ドアに手をかけ、振り返りざまに梓にこういった。

「あ、そうそう。ここの温泉は、恋の悩みに効くらしいぞ。入った方がいいんじゃないかあ？」

悪戯っぽい笑顔を残して、俺は外にでた。

そして、一気にフロントへと駆ける。

「すみません。」

「はい、なんででしょう?」

「ここら辺で、花火とか売ってる場所ないですかね?」

フロント嬢はぼかんとした顔になった。

「11の季節ですとさすがに・・・。」



「あ……そうですね。」

まあ、普通のことだろう。

花火を買う予定だったが、コンビニでなんかお菓子でも買ってこよう、とトボトボと歩きだしたとき……。

後ろからさっきのフロント嬢の聲がした。

「お客様！倉庫に去年の余りの花火があったみたいで……。つくかどうかは保証できませんが。」

そういつて俺に手渡されたのは、線香花火が数10本入っているもの。

「ありがとうございます！あの、お金は……。」

ポケットから財布を取り出そうとすると……。

「あ、いえ、いいですよ。元々処分するものでしたし。」

「ああ、そうですね。ありがとうございます。」

「いえいえ。それにしても、花火、ですか。彼女さんへのサプライズですよネ?!」

「ま、まあそうですね。。」

彼女ではないんだが。

「いいなあー。私もそんなことされてみたいです!」

「あ、そうですね。さっきちょっと気まづくなっちゃって。．．．。なにしたらいいかわかんなかったんですけど。．．．。」

「大丈夫です!絶対に成功しますよ!私が保証します!」

「は、はあ。」

「がんばってくださいー!」

やけにフレンドリーなフロント嬢だったな。．．．。

そう思いながら、コーラを二本買って、部屋へと帰った。

部屋に戻ると、梓が濡れた髪のままテレビを見ていた。

「ほれ。」

買ってきたコーラを差し出す。

「あ、ありがとう。」

「おい、ちょっとこっちついてこい。」

「え、なに？」

露天風呂のある方まで梓を引っ張り、外にでる。

「よし、今からこれをやろう。」

背中に隠し持っていた花火を取り出し、部屋にあったマッチでろう

そくに火をともす。

「え？どこで買ってきたの？」

「フロント嬢にもらった。」

いつになく俺は素っ気なく答えた。

花火をつけたときに、最高に梓を言ばせられるように。

線香花火特有の、パチパチとはじける音が、二人の時間を埋めていく。

「なあ、梓。」

「なに？」

「俺は、お前が笑ってなきや、なにをしても楽しくない。」

俺の発した言葉のせいでふるえた梓の腕が、線香花火の玉を落とした。

「逆に、お前が笑ってたら、なにをしても楽しい。だから、俺の前では、無理してでも笑え。」

梓の肩がふるえる。

線香花火を投げ捨て、かがむ梓の前に立って肩を持つ。

「いや、笑っていてください。」

そういつて、俺は優しく抱きしめた。

俺のしてることは、正しいかどうかなどわからない。

たぶん、何年たってもわからないと思う。

でも、俺は俺が正しいと思ったことをやると決めたんだ。

そして、俺は梓から離れる。

梓は、泣いていた。

「笑え。」

俺は無理に作った笑顔でいう。

しばらく見つめていると、梓は笑った。

俺がいままでみたことのない、最高の笑顔で。

ありがとう、と心の中でつぶやく。

こんな日がずっと続けばいいのにな・・・。

第十七話 温泉旅行・・・3

・・・朝8時、目が覚めた。

「ふあゝ・・・眠いな・・・」

頭をかきながら、隣で寝息を立てている梓に顔を向ける。

あの後、走り回った俺は、緊張の糸が切れたのと、疲れて急に眠くなり・・・

風呂に入った後すぐに寝てしまった。

「あゝあ、結局何もできなかった・・・。」

せつかく女子と止まる機会を得たのに、何もしなかった俺は本当にバカだと思う。

きっと全世界の男子にバカにされることだろう、「この臆病者。」と。

でも、俺はアレでも結構本気を出したほうだぞ？

俺は、梓の家族でもなく、彼氏でもなく、ただの友人だ。

だから俺は、大いに友人じみでいて、それでいて、あいつの重荷を少しでも取り除ければいい。

それが、今の俺にできる最前の一手だ。

「ううん．．．何か言った．．．？」

「梓、起きたか。飯食いに行くぞ。」

「うん．．．わかった。」

梓は眠そうな目をこすりながら、部屋から出た。



\*\*\*

「バイキングだから、好きなの食べよ？」

「うん・・・太っちゃうしなあ・・・」

梓は自分の腹を見つめ、しかめっ面になっている。

俺的に、どこが太っているか分からない。

「なあ、梓って何キ」

「ヤダ」

「だから、何キ」

「ヤダ」

「あ」

「ヤダ」

「……すごい拒否反応だ。」

「……わかった。先行ってるわ。」

「うん」

食事の時間はあっという間に過ぎ、部屋に戻る。

「暇、なんかしんどい」  
「・・・」

「なんかつたって、やるじとねえぞ」  
「・・・」

「今何時？」

「十時だぞ、どじりする？帰るか？」

「そっだね」  
「・・・」

ということでもチェックアウトし、帰りのとおり、バスに乗り、電車に乗り、そして家に帰った。

かなり疲れていて、その時の記憶はなく、二人して眠っていたようだった。

．．．そして、帰り道。

「なあ、梓。」

「なに？」

「その．．．楽しかったかな？」

「うん！本当はもっと何かしたかったけどね。」

「ごめんな、寝ちゃって。」

「でも・・・」

「でも？」

「花火の時は・・・うれしかったかな。」

「・・・はずかしいこというんじゃないか？」

梓の肩を押す。

結構いい雰囲気じゃねえか？

でも、梓の思いはまだわからないままで・・・。

## 第十八話 インヘ・・・1

「暇だ・・・」

時刻は午前3時、昨日早く寝たので、目が早く覚めてしまった。

「梓に電話してみるか・・・？」

スライド式の携帯を枕元から取り、梓の番号にかける。

『もしもし？』

ワンコールで梓は電話に出た。

「こいつも起きてたんだな。」

「梓、今暇？」

『うん、昨日早く寝たから、目が覚めちゃって』

「おう、そうか。俺も同じだ」

『で、暇だけどなに？』

「今日もどっかいけるかな？って思ってたさ・・・」

『どっかってどっか？』

「梓ってチャリ持ってたっけ？」

『あるよ、〜どっかに行くの？』

「うん・・・南のインでも・・・」

『えっ！あそこってチャリでいけるの？』

「フツ・・・まかせろ。俺のこの最新式スマートフォンさえあれば・・・」

説明しよう！！

わかる人もいると思うが、このスマートフォンというものは、アプリという機能があつて、その中にグローバル・ポジショニング・システムgpsというものを使い、自分の位置を把握、それと音声案内してくれる、とにかくヤバイ機能なのだ！！！！

『わかった！そういうことね。いいよ。』

「何時から行く？ここから行くと一時間半くらいかかるけど・・・」



『あそこって、何時からやってるっけ？』

「十時からだから・・・八時半出発で。」

『分かった！じゃあ、後でね。』

「おう。」

電話を切り、スマートフォンをかばんから取り出す。

機種は東、ドコモで、レザフォンってやつだ。

そして、ハードケースで全身を覆っている。

詳しくすぎて分からないって??

そりゃあ、そうだ。

俺は家電ヲタクなのだから。

「げっ……充電しねえと。」

バッテリーの残量が残り少ないので、充電することにした。

「……暇だ。そうだ、p pでもしよっ！」

かばんの中をあさるが、出でこなくて、その代わりに一枚の紙切れが出てきた。

「なんだ、こりゃ？」

その紙には、『p p 借りとくわ！  
無期限で！！ by 勇気』

「無期限で・・・まあ、いいや、今度殴ろう。」

そう心に決め、やることを探す。が、やることなんて無い。

「・・・寝よ。」

眠たくも無いが、寝ることにした。

\*\*\*

「しゅん！待った？」

「いや、だいじょぶ！行くっぜ。」

それから、延々とチャリをこぎ続けて、やっとついた。（会話など、無に等しい）

ってか、なぐんか最近、恋人じみたことしてねえか？

他人からみても、ばっちり恋人に見えるくらいに。

んまあ、これで付き合っていないなんて、神様もびっくりだろう。

「ふう〜・・・やっとついた。」

「そ、そうだね。」

「いいダイエットになったんじゃないかねえか？」

俺は梓の腹を見ながら言う。

「もう・・・わかんないよ・・・」

「はは、悪い悪い。よし、行くか。」

「うん!」

そっぴゃ、なにするために来たんだっけ・・・？

第十八話 インヘ・・・1 (後書き)

第十九話 インヘ・・・2

「・・・なあ、梓。」

「なに？」

「俺らってさあ・・・何しにきたんだっけ・・・」

「えっ！それは・・・アレでしょ・・・」

「アレって？」

「・・・アレだよ。」

「そっか・・・目的なしにきたんだな・・・クソっ！あの一時間半はなんだっただ・・・」

俺はチャリを思いっきりこいできた、一時間半を思い出す。

チェーンははずれ、ブレーキはキーキーなるし・・・

え？金あるんだから自転車買えって？

・・・まあ、今度な・・・

「拓也、とりあえず歩こう？映画館だってあるんだし・・・」

今いるインは、映画館もあり、新潟県内でもかなり大きい、ショッピングモール？なのだ。

「そつだな・・・行くか。」



会おう言って俺は歩き出そうとした、が、梓が俺の服をつかんでい  
る。

「おい、行くうぜ？」

だが、梓は動かない。

動く代わりに、人差し指を立て、「シッー……」と……

「いったいなんだってんだ……？」

そういつと、梓は某百円ショップのほうを指差す。

「おう！勇気じゃねえか……一緒にいるのは……」

「憂……だよ。」

「おう、そうか……」

あいつ、ここまで進んだとは……

付き合ってたのかな……？

いや、それはないだろう、と心の中で思う。

だって、俺らも同じようなことしてるんだし……

今時の中学生なんかそんなもんさ。

「……おい、梓。」

「なに？」

「憂のアド持ってるか？」

「持ってるけど・・・何すんの？」

「今送るんだよ。二人がどうゆう関係か知りたいだろ・・・？」

俺はにやつきながら答える。

「うわ～・・・拓也って悪趣味だね・・・」

「なっ！ただ、勇気が付き合ってるのか知りたいだけだよ・・・」

「ふう～ん？そ～なんだ。」

「・・・そんな目でみんなよ、ほら、早く送ってみろって。」

「いいけど・・・内容は？」

「ちょっと貸してみ・・・」

俺は梓から携帯を借りて、内容を打ち始める。

「・・・と、こんなんでどうだ？」

内容は『元気？今何してんの？』にした。

この内容で、嘘をついたら、二人は付き合ってるということだが、  
0% 確実だろう。 8

「いいんじゃない？送るよ」

「おっ、よろしく。」

「届いたかな・・・？」

テレーレテレーレテレーレ

「「ぶっ！！」」

笑ってしまった・・・

「おいおい・・・着メロ徹の部屋かよ・・・」

「あっ！憂どっか行ったよ！」

多分、メールを返信しに行ったのだろう。

「・・・？あいつ何してんだ？」

かばんをゴソゴソとあさっている。

「あっ！」

とりだしたのは俺のpp

「あの野郎・・・人のものを外で使うか！？」

ジュジュジュジュジュジュ

「あれ・・・？勇氣んどこにメールが来た見てえだぞ・・・？」

「あっ！憂からきたよー！」

「どれどれ．．．」

「「えっ？」」

憂から送られてきたメールは空メール。

「おい！勇気がいなくなつたぞ！」

「あれ？ほんとだ．．．」

「どこいったん．．．うおーい！！！」

「何してんだ？我が親友」

「ゆ、勇氣、ビビらせんなよ……」

「はは、ゴメンゴメン!」

こいつ謝る気ねえな……それより!

「なんで憂さんと二人でいるんだよ?」

「それは、こっちの台詞。なんで梓ちゃんと一緒にいるのかなあ?」

「うっ……まあ、なんとなくだよ……」

「そっ?じゃあ俺もなんとなく」



「・・・わかったよ、で、何しにきたんだ？」

「それがさあ〜・・・やることないんだよねえ・・・」

「こっちもそうだ・・・じゃあよ・・・」

「一緒に回ろう！」

「・・・俺よりも梓たちのほうが早かった・・・」

「まあ、いいけど・・・」

## 第二十話 インへ・・・3

「よし、じゃあどこ行くんだ？」

「」「」「」「」「」「」

「・・・結局さっきと同じじゃねえか。」

今はインにきている。

そこで、勇気と憂と合流し、どこに行くかを決めている最中だ。

「とりあえず、歩こうか！」

口を開いたのは勇気。

梓と憂の手を持ち、どこかに行こうとしている。

そして、俺のいるほうを向き、

お・ま・え・は・消・え・ろ

と、口パクで言っている。

．．．そんなことを行ったことを後悔させてやるう．．．

「お、勇氣！あんなところにFカップ以上の超美人がっ！」

「まじ！？？どっだよー！」

「ほら、あそこの店の中に．．．」

「まじか！よーし！！」

案の定、勇氣はその店にダッシュ。

「いまのうちだ、行くぞ！」

梓と憂の手をとり、勇氣と逆方向にダッシュ。

「えっ！」

二人は驚いたような顔をしている。

だが、このときの梓の顔は普通だったが、憂の顔が少し赤くなったことに、俺は気づいた。

「．．．勇氣くんってほんとに女好きだね．．．」

「そうだな．．．ほんとに引っかかるとは思わなかったんだが．．．」

まあ、引っかかると思ってたけどねっ

．．．ノリで つけてみましたけど、 なにか？

「そういや、 憂．．．さん？」

「憂でいいよ！拓也くん！」

「お、そうか．．．う、 憂．．．？」

「ん？なに？」

「なんで勇氣と一緒に来てたんだ？」

「勇氣くんがしつこくて．．．なかなか断れなかったんだ．．．」

はは．．．ドンマイだな、勇氣。

“しつこい”だってよ！

心の中で、勇氣に爆笑していると、憂が梓に耳打ちしている。

憂が梓の耳から口を遠ざけたとき、一気に梓の顔が赤くなった。

「た、拓也！勇氣くん一人じゃかわいそうだから、行ってくるね！」

・・・声が裏返ってるぞ、梓。

そういつて梓は、さっき来た道を戻っていった。

「・・・な、何しようか？う、憂？」

「うーん・・・とりあえずどっかいこつよ」「..」

「そ、そうだな・・・」

久しぶりに梓以外の女子と話したので、緊張しているのが丸見えだ。

もともと俺はあまり女子と話すのが得意ではなく、前は勇気が女子と話しているのを隣で見っていた。

「あ・・・ギター!!」

ちよつと歩いたところにあつた楽器店のギターを指差している。

「私のお姉ちゃんね、高校で軽音部に入つてて、ギター弾いてるんだよ〜！」

「へ〜え．．．そうなんだ。」

「ギター弾いてるお姉ちゃんね、すつっつごくくかつこいいんだよ〜！〜！」

．．．しばらく話して分かったが、憂はシスコンらしい．．．

そのあとも憂は“お姉ちゃん”のことを話し続けた



「おーいー」

勇気と梓がこっちに向かって走ってきている。

「どっしする、帰るか？」

勇気は自分の携帯のディスプレイをひらいて、時間を見せる。

「・・・5時かあ・・・」

てことは、俺は憂から、二時間近くお姉ちゃんの話聞いていたことになる。

「そうだな・・・帰るか！」

それからまた一時間半ほど自転車をこいで、俺たちの住んでいる町についた。

「じゃーな。」

「おう。」

勇気が家に帰り、俺、梓、憂の三人。

これが両手に花というやつだろうか・・・

「じゃあね。」

「おう、ここなのか？」

「うん。そういえば……はい、これ。」

憂から一枚の紙をもらった。

「……なにこれ？」

「私のアドだよ。よかったらメールしてね？」

「うん……分かったけど、今赤外線したほうが早くね？」

「……そうだね！何で気づかなかったんだろ……」

憂「シスコン＋天然ということが今日分かった・・・」

「・・・と、これでいいかな？」

「うん！それじゃあね〜」

「分かった、じゃな〜。」

その後、俺と梓の住むマンションについたが、梓はなぜか不機嫌で、隣なのに自転車置き場で、「じゃーね」といって帰ってしまった。

その後、家に帰り、ベットに飛び込んで、ふと思った。

なんで梓は不機嫌だったんだろう・・・と。

憂と俺が仲良くしてたからか・・・？

そんなことを考えていたが、睡魔に襲われ、そのまま眠ってしまった

第二十一話 何しにきたんだ・・・？ 1

「ん？このメールは・・・憂のやつか・・・」

今は午前6時。

昨日は帰ってきてからすぐ寝てしまったため、メールに気づかなかった・・・

そのメールを開くと、『おやすみ。』とかかれてあった。

「これだけかよ・・・」

そう思って、メールを閉じようとしたが、まだ下があることに気づいた。

「ん・・・？まじかよ・・・」

そこに書いてあったのは、『明日拓也くんの家に行くよ！』と書いてある。

その内容を見た瞬間、俺は反射的に正座になり、両手で『なんで？』と打っていた。

「そんな急に言われてもな・・・」

散らかり放題の部屋を見る。

最近疲れて帰ってきて、そのまま寝てしまつといつかなり非日常的な生活が行われているので、ごみが散乱している。

「お、きたきた・・・」

携帯をスライドさせ、メールのフォルダを開く。

「なんだ・・・そういつことか・・・」

内容は『私一人じゃないよ！梓ちゃんも一緒だよ』

「まあ、それならいいか・・・」

なぜか知らないが、少し残念と思った自分がいた。

もしかして、憂のことが好きなのか・・・？

自分に自分で聞いてみる。

「まあ、それはねえわな・・・昨日仲良くなったばかりだし・・・  
まあ、掃除するか！」

散らかつてると言っても、ごみが散乱しているだけなので、その「  
みを拾い、掃除機さえかければOKだ。」



「よし！あとは掃除機をかければいいだけだ！」

クローゼットの中から掃除機を取り出す。

この掃除機は引越と同時に購入した、ダソンだ。

この掃除機は吸引力がハンパない。

だからといって、そこまでうるさいわけでもないの、かなりいいものだと思う。

「よし！きれいになったな・・・後はこのテレビ周りだけだ・・・」

ちなみにこのテレビは東のLEDレザってやつで、かなりキレイだ。

このテレビは掃除機と同じで引越すと同時に購入したもので、42V型にした。

「意外と早く終わったな・・・何時にくるんだろ?」

そう思い憂にメール。

ブブブブ・・・

「はやっ!」

送ってから二十秒後に返信が・・・

『9時くらいかな!』と・・・

「9時だったらまだ時間あんな・・・」

部屋の時計を見る。

「何か作るか．．．何が好きなんだろうな、憂は。梓は甘いもんなんでも好きだけど．．．」

そう思い、憂に『甘いもんで何が好き?』と送ってみた。

「やっぱ早いな．．．」

また二十秒後にきて、『んゝ．．．甘いものなら何でも好きだけど．．．普通にタルトかな!』

「こんな長い文を二十秒で．．．タルトか．．．作れっかな．．．」

だが、俺のスマートフォンにかかればこんな余裕だ!

料理専用のアプリを開き、タルトを探す。

「ほうう・・・意外と簡単じゃん！」

そう思い早速開始。

「よし！あとは焼くだけか・・・」

時計をチラッとみると、もう8時だ。

「あ．．．朝飯食ってねえや．．．どうすっかな、朝だけど、オムライスでいいか．．．」

オムライスなら、ケチャップライスを作って、卵をかければいいだけなので十分ほどで出来る。

「．．．っと！出来た。食って、シャワー浴びるかな．．．」

．．．というところで、食ってシャワーを浴びて、もう8時40分。

「どれ着ようかな．．．」

服を選んでいたところ、チャイムが鳴り、梓、憂参上！

「おい！ちょっと待てよー！」

ちなみに俺はパンツだ。

「お邪魔しまーす．．．きゃー！」

．．．そらそうだ、勝手に入ってくんのが悪いんだぞ．．．

「ちょっと着替えるからまってるよ．．．」

そして着替えて、三人でリビングへ．．．

「なあ、何しにきたんだ？」

「ん〜．．．分かんないけど、なんかしに来た！それより、なんか甘いにおいしない？」

「嗅覚スゲえな．．．タルト焼いたんだよ」

「ほんとに……後で食べよう」

「……俺も食つからな。」

こんな感じで、梓と憂が遊びにきたが、何すんだ……？

そのころ、勇気は……

「グーーーーーzzz・・・」

就寝中でした



第二十二話 何しにきたんだ・・・？ 2

「・・・で、何すんだ？」

「」  
「」

「はあく・・・用も無いんだったらくるなよ・・・」

実は今日、最近アレをしていないので、アレをしようと思ったのだが・・・（アレはご想像にお任せします）

「まあ、タルトでも食ってるよ・・・」

「ほんと！いただきます！」

・・・早いな、もうなくなっちまっつ！

「おい！俺の分も残しとけよ！」

「ふえ？はに？ひこえない〜！！」

え？なに？聞こえないだと！

「梓、勇気呼ぶよ・・・」

ブーーーーっ！

「おい！何してんだ・・・ああ・・・俺のパソコンが・・・」

ちなみにこのパソコンはVAIOバイオでソニーのやつだ。

俺が必死にパソコンをふきふきしている間に、タルトはなくなっ

いた・・・

「梓、本気に勇気呼ぶよ・・・！」

「いいよ〜呼べば？」

この野郎・・・マジで呼んでやるからな！

「あ〜分かった！呼ぶぞ〜！」

「やめて〜！」

そういったのは梓ではなく、憂だった。

「うっ、憂？」

「勇気くんさ、なんか苦手なの・・・」

このとき、梓が一瞬だけしかめっ面になったのが分かった。

「そ、そっか・・・じゃあ、やめとくよ。」

部屋に険悪なムードが流れる中、梓が急に立ち上がった。

「そ、そういえば、私、用事あったんだっ！」

「どんな用事だ？」

「それはね・・・ちよっとあってね・・・じゃねー!」

「あ、おい！」

そういつて梓は家を出て行った。

俺は理解が出来なかった。

なぜ、これだけのムードで部屋を出て行くのかと・・・

だが、心当たりはひとつだけあった。

それは、勇気が好きであろう、憂が勇気を嫌っているかもしれないという事実。

梓にとっては、勇気に好かれること自体がうらやましいはずだ。

「拓也くん、私なんか悪いこと言っちゃったかな・・・」

「そ、そんなことはねえだろ！きっと本当に用事があるんだよ・・・」

憂にそう思わせようとした。

いや、そう思わせなければいけなかった。

そう思わせなければ、憂が泣いてしまおうと思ったから。

「さ、何する？俺に出来ることなら何でもするぞ！！」

憂を元気付けようと、こんなことを言ってみた。

「本当・・・？」

「ああ、出来ることならな！」

「じゃあさ・・・何か一緒に作らない？」

「おお、いいぞ！何がいい？」

「ん・・・冷蔵庫見てもいい？？」

「ああ、いいぞ〜」

「ふうん・・・結構そろってるね・・・」

「これでも料理は得意なほうだからな。」

「ん〜・・・拓也くん、ここで昼食べてもいい？」

「そっちがいいんならいいぞ〜」

「そう？じゃあ、チャーハンと春巻きかな・・・」

「いいぞ〜てか、料理できんの？」

「お姉ちゃんにいつも作ってるからね！」

ああ・・・そうだった、憂はシスコンだった・・・

「そうか、じゃあチャーハンは俺が作るから、春巻き作ってくれるか？」

「うん！」



そこから料理スタート！

俺はフライパンを少し温め、そのフライパンにごま油を広げる。

そこにきざんだ玉ねぎ、ひき肉を入れる。

その間にご飯を出し、ボウルで卵三個とからめる。

そのご飯をフライパンに入れその上にすりおろしたんにく、しょうがを入れ、そこに中華味という化学調味料、こしょうを入れ、豆板醤、オイスターソースを入れて、パラパラになるまで炒めれば完成だ。

「おし！出来たな・・・憂は・・・うお！」

皿の上にはきれいに巻かれた春巻きが・・・

俺以上かもしれない・・・

「油もの用の鍋ってある？」

「あ、ああ、そこに入ってる」

パチパチという心地よい音を立てながら、春巻きは一個ずつ完成していき、こんがりとキツネ色になった春巻きたちが完成した。

「すげえな、こんなにうまく作れるなんて・・・」

春巻きを箸でつかみながらそういった。

「チャーハンもおいしいよ！にんにく入ってる？」

「ああ、隠し味でちょっとな」

春巻きとチャーハンを平らげ、二人してゴロン、と寝っころがった。

「なんか、眠いな・・・」

「そうだね・・・」

「寝るか・・・」

そういつて俺はソファーに腰掛けた。

「そうだね・・・」

俺たちはそのまま眠りに落ちた・・・

「はっ！今何時だ？」

時計を見ると、午後七時。

「やばっ！もうこんな時間がよ．．．」

起き上がるうとしたとき、ひざに何かが乗っているのに気づいた。

「う、憂？」

「拓也くんの寝顔みちゃった〜！」

「なっ！」

自分でも顔が赤くなっていくのが分かった。

もしかしたら、本当に憂のことが好きなのかも知れない・・・

「拓也くんなんでもしてくるっていったよね・・・?」

「そうだけど・・・」

「私と・・・っ、付き合ってくれない?」

いきなりかよー!!

憂のことはキライじゃないけど・・・好きではない?

「憂、ちょっと考えさせてくれないかな？」

「なんでもしてくれらっていったよね？今答えてほしいの・・・」

そんなこといわれたって・・・

「憂・・・」

「な、なに？」

「俺でいいんだったら・・・いいよ・・・」

「ほ、本当？」

「お、おう!」

「そっか・・・よかったあ・・・振られるかと思ったよ・・・」

憂は小さく笑う。

「じゃあ、今日は帰るね!」

そういつて憂は鼻歌を歌いながら帰っていった。

憂が俺の人生初めての彼女であり、初めて俺のことを好きになってくれた人だった。

しばらくポーっとしていてふと思った。

俺のどこがよかったんだろっな？

自分で小さく笑い、俺は夕飯を作り始めた



## 第二十三話 俺の選択肢！

「・・・で、こうすんだよ。」

「おお〜！こうやって作るんだ！お姉ちゃんに作ってあげよう」

「ははは・・・」

ここ数日で、俺に一つ、大きな変化がおきた。

それは、憂が彼女になったこと。

今まで俺は生きてる年数に彼女いない歴だったが、もうそれは過去のことだ。

で、今はガナツシユの作り方を教えている。

ガナッシュとは溶かしたチョコレートをたっぷり生クリームを加えたり、または温かい生クリームにチョコレートを溶かし込んで作る口溶けの良いチョコレートのことで、意外と作るの簡単だ。

ここにコーヒーなどを入れてもおいしい。

まあ、普通の人が思ったら、「なんで彼女と一緒にいるのに料理なんか作ってるの?」と思う人が多いだろうが、何を隠そう、俺は女子と話すのが苦手だ。

たとえば、彼女であつてもな・・・

てことで、料理を作っているほうが、楽でいい。

「ねえ、拓也?」

そうそう、もう一つ変化がおきた。

それは、憂が俺のことを呼び捨てで呼ぶようになったこと。

「ん？なんだ？」

「明後日入学式なんだけど、必要なもの買った？」

「必要なものって言ったって、制服と教科書くらいだろ？」

「.....」

「え？なんか他にあったっけ？」

「電子辞書は.....？」

「もう買った・・・買ってねえや！スマートフォンじゃだめなのか？」

「当たり前じゃん！じゃあ、買いに行こう？」

「おう、そうだな！」

ところで、ヤマ 電気にやってきた。

ここは俺の家みたいなもんで、週1で来ている。

「ん〜・・・どれにしようかなあ〜・・・」

今の電子辞書は、やばく高性能で、音声検索してくれるやつもある。

「私はこれにしたんだ」

そういつて憂はシャーの電子辞書を指差す。

この電子辞書は結構コンパクトで、“学生推薦！”などと書いてある。

「うーんじゃあ、俺もこれにしようかな」

「お金はあるの？」

「ああ、大丈夫だ、それより……スピーカー見てもいいかな？」

「いいよ」

俺が言っているスピーカーというものは、ホームシアターというもので、テレビにつけようかな〜と思っている。

普通の女の子だったらここで「え〜・・・」とかいって嫌な顔をするだろう、だが、憂はそんなこと一言も言わないので、俺にはもったいないくらい本当にいい子だと思う。

「お・・・意外と安いじゃん！」

ヤ　ハのスピーカーを見ながら言った。

価格は23000円だ。

なぜこの価格で安いと思うかというと、ホームシアターの中でもかなり場所を必要とする5・inchというものだからだ。

高いものだと、30万位するやつもある。

で、結局このホームシアターと電子辞書を購入し、憂と一緒に近くにあったサイリアへ行った。

「なんか悪いな．．．いろいろと付き合わせちゃって．．．」

「いいのいいの！楽しかったし！」

憂はそういって、ドリンクバーのコーラを飲み干した。

「飲み物取ってくるね！拓也はなんかいる？」

「いや、俺はまだいいや」

軽く笑いながら憂にそういい、無意識に辺りを見回した。

「あれって・・・梓か？」

向かいの席にロンググツインテールの女の子と長髪の男がいるのに気づいた。

「てことは・・・アレは勇気か・・・」

そつと気づいたとき、額から汗が落ちてきた。

そしてもう一つ気づいた。

あ、俺慌ててる、と。

「おまたせ〜！って、なんかあった？顔色悪いよ？」



「あ、ああ大丈夫だ。なんでもねえ。」

自分自身でも、キョドっているのが分かる。

まあ、向こうも気づいてねえみたいだし、大丈夫……

「あれ？拓也と……う、憂？」

さっそくみつかったやいましたああああ——！！

やべえ、超にらんでるよ……

梓じゃなくて、勇気が……

「な、なにしてんの?」

梓もかなり慌てていることに気づいた。

「うーんとな・・・これは・・・」

俺が言い終える前に、憂がこっちの席に移り、自分の手と俺の手を絡ませた。

「梓ちゃん、私たちね・・・付き合ってるんだあ」

憂は梓を挑発するような声を出した。(まあ、挑発しているが・・・)

そして俺の携帯がなった。

「誰だよ・・・こんな時に・・・」

相手は勇気。

内容は“いいもん！梓ちゃんはもらっからな！”と・・・相変わらず、言葉のチョイスを間違っている。

で、憂と梓はにらみ合ってるし、何よりも空気が悪い。

これが修羅場というものだろうか・・・？

どうにかしてこの場を切り抜けなければ・・・

問：俺は、どうするべきなのか・・・

### 選択肢

1、憂を連れ出し、そのまま帰る。

2、梓を落ち着かせ、憂と別れる。

3、このままの状況で、落ち着くのを待つ。

答：今は、梓より憂のほうが好きだ！だから俺が選ぶのは・・・

「憂、行くぞ！」

「えっ！」

憂を席から立たせ、財布から五百円を出し、店員に「おつりはいいません！」といって店を出た。

梓が悲しそうな顔をしているのは、後ろを振り向かなくても分かった。

しばらく走って家に着き、憂を中に入れた。

「ごめんな、走らせて・・・」

息を切らせながら憂にそういった。

「ううん、いいの！」

そう答えて、憂は床に寝転がった。

二人して呼吸が落ち着いたところで、憂が俺に尋ねた。

「本当はさ、梓ちゃんをかばうかと思ったよ・・・」

泣きそうな声で、俺にそういった。

「んなわけないだろ！」

そついい、俺は憂を抱きしめた。

強いけれど、やさしく・・・

「憂、飯食ってくか？」

「うん！」

二人で夕食を作り、一緒に食べた。

そして時間がたち、泊まっていくわけにもいかないので憂を家まで送った。

「今日はありがとう！」

「お礼言われることなんかなんもしてねえぞ？」

俺は笑いながらいった。

「あっ！」

そっつい、憂は指をさし、反射的に指を指したほうを見た。

「なんだよ・・・何でもねえじゃねえか・・・」

憂のほうを振り向きうとした時、ほほにほんのり暖かい感触が伝わった。

「じゃーねー！」

そういい憂は家に入っていった。

「あれ・・・？俺、今キスされた・・・？」

そつと気づいた瞬間、暑くも無いのに、汗がにじんできた



第二十四話 入学式！だけど・・・

ジュジュジュ ジュジュジュ

「ふあ〜・・・」

機械的な目覚ましの音で、目を覚ました。

一人きりの部屋を見わたし、洗面台へと向かう。

顔を洗って、キッチンへと向かい、料理を始める。

春休みの前のいつもの生活。

だが、しばらくゲータラしていたので、この生活はきつい。

作るものは味噌汁と鮭の塩焼きといういたって和風の朝ごはんだ。

できた物をテーブルへと運び、いただきます、と小さく言ってからご飯を食べはじめる。

ここへ引越す前は、今のように希望などもってもしなかっただろう。

俺が希望をもてるのは、梓がいて、憂がいて、勇気がいるからだろう。

そんなことをふと思ったとき、おとこの梓への態度は、あつちにとってはつらいものだったかもしれないと思った。

「いちおうメールしとくか・・・」

罪悪感が生まれたので、梓に“元気か？今日一緒に学校行かない？”と、ありきたりなメールを送ってみた。

ちなみに、憂とは家が間逆なので一緒に学校に行くことは無い。

ピピピピ・・・

「お、きたきた・・・はあ!？」

メールの内容を見て驚いた。

その内容というのは“なにいつてんの？憂と付き合ってるでしょ！中途半端なことしないでよ!!”と・・・

「あゝあ・・・余計怒らせちゃったな・・・てか、付き合ってるって分かったのか？」

まあ、いつも俺が梓をかばうから、かばわなかったからおかしいと思っただらうけど・・・

とりあえず梓には“悪かった。じゃあまた学校でな!”と返信した。

「くよくよしてても仕方ねえしな・・・学校いくか!」

学校へは徒歩で10分、今は7時40分なので、今行くところまでいいだろう。

携帯と必要なものをかばんに入れ、家を出た・・・が

「うおっ！」

「あっ！」

玄関先で梓とばったり会ってしまった。

「い、一緒に行くか？」

「いいよ、憂になんか言われんのやだし。」

梓は冷たく言い放って、一人で早足で歩き出した。

しかし、俺はそれを追いかけて、腕をつかんだ。

「なに？遅れちゃうんだけど！」

「なんでだ？なんでキレてんだよ！俺が憂と付き合ってるからか？」

「そ、そんなわけ無いじゃん！何で私が拓也のことでキレなきゃいけないの！？」

「あ、おい！」

梓は俺の手を無理矢理振り解き、俺から逃げるように走っていった。

「はあ．．．もういいや、学校い」

\*\*\*

というところで、学校に着いた。

入学式が終わったら帰りなので、どこかにいこうかな〜と思っている。

で、とりあえず教室に案内されて、黒板に張ってある紙どおりに、席についた。

どうやら、憂は違うクラスらしい。

勇気と梓とは一緒だが・・・

椅子に座ってため息をついていたら、後ろから背中を軽くたたかれた。

「はい？」

「拓也・・・だよな？覚えてる？」

「え〜と．．．」

誰だ？俺の知ってるやつでめがねかけてるやつなんかいたっけ．．．？

「ちょっとめがねはずしてくんない？」

「いいけど．．．」

めがねをはずした瞬間誰か分かった。

五、六年いっしょだった中津なかつ 康介こうすけだ！

「康介．．．か？」

「おお〜！正解！！」

「めがねかけてたから誰か分かんなかったわ．．．」

キーンコーンカーンコーン

「おっと、時間だ、後でアド教えてね〜！」

「おう！じゃあな〜」

どうやらこいつも同じクラスらしい・・・

その後、講堂に集合して、入学式の後、下校となった。

勇気からメールが来ていて、“校門前に集合！！”だそうだ。

俺と憂と梓に一斉送信したらしい。

というところで、校門前に集合〜！

俺が一番最初だったらしく、まだ誰もいなかった。

それから十分後、全員集合したが、どうも険悪なムードが流れている。



「あ、あのね、梓ちゃん！」

沈黙を切り開いたのは憂だった。

「もし．．．もしだよ？梓ちゃんが拓也のことを好きなら、私は別れる！！」

「へ．．．？何言ってるの？」

「で．．．梓ちゃんは好きなの？」

「えっ！」

「答えないと私がずっと付き合っちゃうよ．．．？」

そういつて、憂は俺の手を握った。

「どうする．．．の？」

「わ、私は、拓也のことが好きじゃな．．．い！！！だけど、拓也が誰かと付き合っちゃったら、って思うと、悲しくなるの！！」

「．．．分かった！じゃあ、私は拓也と別れる！だから．．．いっしょにがんばる？」

俺にはこの“がんばる？”の意味が分からなかったが、梓には分かっただけで、「うん！」と答えていた。

てことで、俺争奪戦が始まったらしい．．．

あれ．．．？

誰か忘れてるような．．．

まあ、いいか！

## 第二十五話 新歓ライブ！

「おーい！拓也〜！！」

「なんだ？康介？」

「結局アド教えてくんなかったじゃん〜・・・」

「あ、忘れてた・・・わりいわりい」

「別にいいけどさ・・・とりあえず教えてよ！」

「おう、じゃあ赤外線な。」

康介と俺の携帯を近づけ、アドを交換した後、放送がなった。

“これより、講堂で新入生勧誘イベントを開催します。”

「・・・康介は部活入るの？」

「うん、中学校で陸上部入ってたから、陸上かな」

「ふーん、そうなん・・・いたっ!!」

「拓也、早く行こう！軽音部のライブ始まっちゃっよ!!」

俺の右手を梓、左手を憂がつかんでいる。

「お、お二人さん・・・俺ちぎれちゃっよ・・・」

「大丈夫!!」

いや・・・ちぎれはしなくても、取れちゃうよ・・・

「え？拓也、こんなかわいい子と・・・てか、二股かよっ!!」

「ち、ちがう！こいつらは友だちで・・・そ、それより、助けてくれえええ・・・」

「あ、行っちまった・・・」

\*\*\*

てくてくてくて、ずるずると引きずられて講堂へ。

「お二人さん・・・歩けるから・・・恥ずかしいよ・・・」

そんなことを行っても無駄。

まだ両手をつかまれている。

だが、“1、2、3、4”という掛け声がきこえた後、二人はほぼ同時に俺の手を離れた。

「ん．．．どうしたんだ？」

ステージの上には、一番前にギターを持った茶髪で髪を真ん中で分けている人がいて、その隣にはレフティーマデルのベースを持ったロングで黒髪の背の高いきれいな人がいて、その後ろにドラムをたたいて、前髪をカチューシャで止めている人がいて、その隣に軽くウェーブのかかった金髪で、キーボードを弾いている人がいた。

そして、曲が流れ始めた

諸事情で歌詞を掲載できません。ご了承ください。

．．．とまあ、こんな感じの背中が痒くなるくらいの甘いメロディ  
ーが流れ、演奏が終わった。

ちなみに曲名はふわふわ時間<sup>たいむ</sup>。

だが、四人の息がぴったしで、聞いていてとても心地よかった。

「ねえ、拓也！あの真ん中にいるのが、私のお姉ちゃんだよ！！」

「へえ、そうなんだ．．．」

よく見れば、かなり曇と似ている。

「決めた！！」

「・・・何を？」

「私、軽音部に入る！！」

「憂はどうすんだ？」

「私は・・・考えとこうかな・・・お姉ちゃんのご飯とか作んなきゃいけないし・・・」

「そ、そうか！俺はどうしようかな・・・」

「拓也は私が無理矢理入れるよ・・・？」

「無理矢理とか言うなよ・・・じゃあ、入ろうかな？」



「ほ、ほんと？」

「おう！俺は女には嘘はつかねえぞ！！」

「じゃあ、ギター教えてあげるねー！！」

「そうか？じゃあ、よろしく！！」

という事で、軽音部に入ることになった！

あ、ギター持ってねえや・・・

## 第二十六話 入部！

キンコンカンコン

「おっと、もうこんな時間か。それでは、キミたちのhigh school lifeをenjoyしようではないか〜！」

．．．俺たちのクラス、1年2組の担任は、英語をやたらと使う国語教師らしい。

「ややこしいな．．．」

ハア．．．とため息をついた瞬間、後ろからブレザーの襟を引っ張られた。

「拓也、放課後だよ！軽音部の部室いこう！」

「行くから、引っ張るなよ．．．服が切れちまっじゃねーか」

ズリズリッ

「「あつ」

「切れた・・・？」

「大丈夫・・・みただ、ちょっとほつただけだし・・・これくら  
いなら直せるよ。」

「「じめんね」

「な、なんだよあらたまつて。気にすんな！」

「そう・・・？じゃあ、行こう！」

「おう！．．．でも、勇気はどうすんだ？」

「今いないから、いいかな．．．」

「そっ？じゃあ、行くか！」

\*\*\*

てことで、部室前だけど．．．

「やってる様子が．．．」

「ないね．．．」

部室前には“軽音部へようこそ！”という文字がホワイトボードに書かれているが、楽器の音はまったくしない。

「ねえ？」

「は、はい？僕たち、別に怪しいものでは・・・」

「もしかして・・・入部希望の中野梓さんと、夏季拓也くん？」

「あ、そうですね・・・」

「私は部長の田井中たいなか 律りつよろしくね！」

「あ、はい。こちらこそ・・・」

「・・・じゃあ・・・」

「「じゃあ？」」

「確保——！！！！」

「おわっ！..！」

言葉の通り確保され、部室に連れ込まれた。

部室には、憂のお姉さん、平沢唯先輩、背の高い秋山澪先輩、おつとりした感じの琴吹紬先輩たちがいた。

「名前は？」

「中野梓...」

「夏季拓也...」

「血液型は？」

「A...」

「O...」

「好きな食べ物は？」

「えつと・・・」

「その・・・」

「そんなにいつぺんに聞いたら答えられないだろ！ごめんな・・・」

「いや、全然大丈夫です！」

「で、二人は何のパートなの？」

「私はギターを少し・・・」

「僕は何にも弾けないんですけど・・・」

「じゃあ、梓・・・だっけ？弾いてもらおうかな！」

「はい！」

ジャラアアアア〜

う、うまい！！ 全員の心の声

「う、ごめんなさい、やっぱり聞き苦しかったですよね」

「いや、そんなことは」

「ま、まだまだだね!？」

えっ!？ 全員の心の声 part 2

「私、唯先輩のギターもう一回聞いてみたいです!!」



「あゝ．．．えっと、ライブのせいできっくり腰になったからまた今度ね！」

く、くるしい．．． 全員の心の声 part 3

「ま、まあ、これからよろしくな！あと、拓也は何がやりたいんだ？」

「俺は．．．」

「ギターです！」

「えっ？」

俺のかわりに梓がそういった。

まあ、やりたい楽器なんて無かったから、何でもよかったのだが．．

「そうか！じゃあ、今月中に買ってきてくること！！」

「はい！！」

「それじゃあ、今日は失礼します！」

「おう！また明日な〜！」

\*\*\*

「なあ、ギターっていくらすんの？」

帰り道、梓と一緒に帰っている。

「う〜ん．．．あんまり安すぎるのもよくないから、5〜6万かな」

「そんなに！？節約しないと・・・」

「やめるとかいったら許さないからね！」

「い、言わないからっ！殴るのはやめる！・・・」

「はは、本気で殴るわけ無いじゃん！」

そう梓は笑った。

ギターをもって帰る梓の顔は、今まで見た梓の顔の中で一番生き生きしているように見えた。

「あ、そうそう、ギターは私が教えてあげるね！」

「そうか？わりいな・・・」

「いいよ、じゃあ、また明日！」

気がつくと、俺らはマンションの前にいた。

「おう！また明日！」

スキップをしながらエレベーターに乗る梓の姿を見て、本当に子供だな．．．と思った

## 第二十七話 ギターを買いに・・・

「うおっ！新潟にこんなところがあったなんて・・・」

「へへ・・・すごいでしょ！」

今は梓とバスに乗り、楽器店に来ている。

ちなみに今日は木曜日、学校や部活をサボったわけではない。

二時間前・・・

\*\*\*

「」「ごんにちわ〜！」

「お、梓に拓也じゃないか。」

「そうですね・・・そういえば、佐藤勇気ってやつ来ました？」

「あゝ、来たよ！知り合い？」

「まあ、友だちなんですけど・・・じゃあ、勇気はどこにいるんですか？」

「さっき来たけど、今日は用事があるらしいよ」

「そうですね！でも、あいつの用事って、どうせ女だろ・・・」

「まあ、そんなことより、拓也はギター買ったのか？」

「いえ、まだですけど・・・」

「なら、今すぐかって来い！梓と一緒に！」

「えっ！ちょっと・・・」

\*\*\*

という感じで、部室を追い出され、ギターを買いに行くはめに・・・

てか、あの人たちお茶してたじゃないか！

「拓也？聞いてる??」

「あ、悪い。ちょっとボーっとしてた・・・」

「拓也のためにここに来たんだから、もうっ！」

そういつて、梓はほほを軽く膨らませた。

梓のこういう表情を見たのは初めてなので、少しドキッとしてしまった。

「で、このギターが私の使ってるムスタングってやつで・・・」

楽しそうにギターを見ながら説明する梓を見て、本当に好きなんだな～と思った。

「拓也！聞いてるの?」

「わ、悪い、聞いてるぞ〜！」

「じゃあ、何で謝ったの？まあ、いいけど・・・で、今いくら持つてんの??？」

「えーっと、一応十五万おろしてきたけど、全部使わないよな・・・？」

「うそ!?!十五万もあるの!?!じゃあ、これ買えるじゃん!?!」

まるで聞いてないが、梓は一つのギターを指差した。

303

種類はストラトキャスターというらしく、メーカーはFender  
U・S・Aらしい・・・フェンダーニューエスエー  
(何がなんだかさっぱり分からないが・・・)

「これなら軽いし、初心者向きだと思っよ!」

「ふーん・・・そうなんだ。」

片手で値段を見ると、十五万に×印がついていて、十一万となっている。



現品限りらしい・・・

「拓也、これでいいよね？現品限りだから今買わないと、なくなっちゃうよー！」

「梓がいつて言うなら・・・」

「分かった！すみませーん！！」

そういつて梓はレジの方へと駆けていった。

「十一万円になりまーす！」

わかい茶髪の店員が、ギターを発泡スチロールにくるんでいる。

「じゃあ、これで！」

俺はぴったし十一万出し、財布には4万。

「今月ヤバイな・・・スピーカー買ったし、あと4万しかねえよ・・・」

ちなみに今日は15日、仕送りがあるのは29日だ。

普通の人は余裕!と思うかもしれないが、梓や勇氣、憂がよく遊びに来て、昼食や夕食を食べていくことが多いので、どうしても材料が必要になる。

「はい!拓也!!!」

梓から小さな紙袋を渡された。

「これ何?」

「ピックだよ!よかつたら使ってたね!!」

その言葉の通り、紙袋にはギターの色と同じ色のピックが入っていた。

「今買ったのか?」

「そうだけど・・・」

「悪いな、使わせてもらおうわ！」

「うん！」

「じゃあ、行くか！」

そして外に出て、バスを待っていると、梓がふらつ、と倒れかけた。

「梓？大丈夫か??」

心配しながら梓の顔を覗き込む。

顔はかなり赤い。

「風邪か？」

「かもね・・・さつきからちょっとだるかったんだ・・・」

「なんだよ、言えばよかったのに・・・」

「だって、拓也がギター買おうとしてるのにさ・・・」

「そうか、ほら、バス着たぞ。乗ろう。」

倒れそうな梓の体を支え、バスに乗る。

ここから家の近くのバス停までは、十分くらいで着く。

「大丈夫か？もうちょっとだから、もう少し我慢してくれ」

「うん・・・」

「ったく、五月だったのに、寒すぎるよな」

「そうだね・・・」

そして、バス停に着いた。

「ほら、梓、降りるぞ」

ふらふらしている梓を支えながら金を払い、バスを降りた。

「ほら、乗れよ。」

あまりにも梓がつらそうなので、俺はしゃがんで背中を出した。

「えっ、いいよ、ギターもあるのに・・・」

「大丈夫！これでも力あるんだぜ！乗れよ！」

「うん、ありがと・・・」

「いいよ、気にすんな！」

「あ、そういえば・・・」

「どうした？」

「お母さん八時に帰ってくるんだ・・・」

「鍵は？」

「ポケットに入ってる……」

「そうか、分かった。」

そして、家の前についた。

「ほら、鍵くれ。」

返事が無い。

「梓？」

すじすじ……

「寝てんのかよ……うおっ！寒っ！！」

こんなところにずっといると俺も風邪を引いてしまいそうなので、

とりあえず梓を家に入れたい。

「鍵は．．．たしかポケットにあるって言ってたよな．．．」

梓の下半身を見つめる．．．

「ここに、手を入れなきゃいけないのか．．．？」

本心は入れたい気持ちが強いのだが、俺も人間なので、多少の罪悪感が生まれた。

「いや！これは梓を助けるためだ！！決して、梓の下半身に触るためではない！！」

勇気を出して、ポケットに手を突っ込んだ。

が、鍵らしいものは無い。

「どっなあってんだ．．．？あ、反対側か．．．」

案の定、反対側に鍵があったので、手を突っ込んだ。

二回目は意外とすんなり出来た。

「このまま、襲っちゃおうか・・・」

なんてことを考えていたが、それは人間としてダメなことなので、やめておいた。

梓の家の鍵を開け、梓の部屋に入り、書置きを残した。

“俺は家に帰るわ！なんかあったら、メールくれ！”と

そして俺は自分の家に入り、ギターをあけてみた。

そして、ちょっと触ってみた。

俺はそこで初めて、やっと軽音部に入ったという実感がわいた。

そしてなぜか、梓にありがとうといいたくなった。



だが、わざわざ言いに行くわけにはいかないの  
で、梓、ありがとな！」

と、俺は一人の部屋で、つぶやいた

第二十八話 二つって、軽音部？

「お、おもい・・・」

「ギターは何でも重いよ」

「そりゃそうだけど、何で梓のギターまで・・・」

「ギター教えてあげるから、文句言わない！」

「はい・・・」

今は登校中。

公園の桜がきれいに色づいている。

足元のあたりも、桜の花びらで、いつもはグレーのアスファルトが、ピンクに染まっている。

だが、俺の心は憂鬱なグレーの色。

その理由は、二時間前・・・

\*\*\*

ピピピピーンポーン

「ん・・・？誰だ？こんな朝っぱらからチャイム連打してるやつは・・・」

ちなみに、このときは五時半だ。

「はい・・・で、何のようだ？梓・・・」

猫がらのパジャマに身をつつんだ梓だった。

「お腹すいた・・・」

「・・・お母さんは？」

「友だちと旅行・・・」

「なんか作ればいいのに」

「作ったけど、違う物質に変化しちゃって」

「物質って何だよ」

「卵が炭に」

「．．．入れよ」

「いいの？」

「食うもんじゃないんだろ．．．？いいよ」

「ありがとっ！じゃあ、早くご飯！」

「まだ早いだろ．．．俺、眠いし」

「お腹すいた」

「うっ．．．そんな目をされると．．．」

「作って？」

「ハイ!!」

こうして、俺は梓の催眠術にかかってしまった。

ここまでではよかったのだが．．．

「ふっ．．．ごちそうさま!」

「お粗末さまでした．．．」

「あと30分くらいあるね．．．パソコンしてもいい？」

「いいけど、壊すなよ．．．?」

「壊さないし!てか、どっやったら壊れるの?」

「まあ、それもそうだな・・・」

20分後

「梓〱そろそろ学校に・・・っておい！」

俺のパソコンが、牛乳まみれに・・・(泣)

「壊しちゃったかな・・・」

「キーボードは壊れたかな・・・まあ、マシンとディスプレイは大丈夫みたいだし・・・」

「ごめんね・・・」

「な、泣くなよ！キーボードは2000円くらいで買えるからな！」

「うん・・・」

「じゃあ、学校行くか？」

「うん！じゃあ、着替えてくる！」

「わかった！」

5分後

「拓也！行こう！」

「おう！」

「じゃあ、ギターもって！」

「・・・は！？」

「だから、ギター持ってよ！」

「キーボード壊したんだぞ！」

「気にしない」

「気にしる!」

\*\*\*

で、この状況。

「梓・・・?」

「なに?」

「疲れた・・・」

「もうすぐ学校だから!がんばって!」

「はい・・・」

キーンコーンカーンコーン



「はあ、やっと終わった・・・」

「拓也！いいこうー！」

「分かったよ・・・」

このとき、この二人がどれだけ教室内で噂されていたかは、この二人は知るよしもない。

「「こんにちわー！」」

「おっす！」

「なんだ・・・律先輩だけか・・・」

「なんだってなんだよ・・・おっ！拓也、ギター買ったのか？」

「まあ、一応・・・」

「ふーん」

「「・・・それだけ!?!」」

「だって、私ドラムだから見てもわかんない!」

「あ、そうですか・・・」

「それより、ムギ早く来ないかな?・・・お茶、お茶」

「律先輩・・・ここって何部ですか・・・?」

「ん?軽音部に決まってるじゃん!」

「じゃあ、なんでティーセットが・・・」

「ん?お茶飲むために決まってるじゃん!」

「そ、そうですか・・・」

この部、大丈夫なんだろうか・・・？  
二人の疑問・・・

第二十九話　こんなんじゃダメですーっ！

昨日買ってきたギターを担ぎ、俺と梓は部屋にやってきた。

「「こんにちわー!!」「」

「おっ、よう、拓也、梓！」

部屋には、四人の先輩がすべてそろっていた。

「よしっ！二人も来たことだし・・・」

練習するのか？と思ったが・・・

「お茶にするか！」

「「えっ?」「」

「れ、練習はしないんですか??」

「また後で」

「ていうか、そんなことしたら先生に・・・」

ガラッ

「あっ！」

「あ、あの・・・」

「ムギちゃん、私ミルクティーね！」

「ええっ!?!」

「この人は先生なのか・・・？」

「この子達が新入部員??」

あ、どうやら、先生なようです・・・

「もう一人いるけど、今日は来てないよ〜！」

「そうなの？ムギちゃん〜！お茶まだ〜？」

「は〜い！」

てなことで、先輩 + は、お茶を飲み始めた。

「あ、梓？何してるんだ??」

「もしかしたら、私の自主性を試されているかもしれないから・・・」

「そ、そうか？」

「うん！だから、今から弾く〜！」

ジャラアアアアン

「〜んんん」

「ええええ!!!!」

「さ．．．さわちゃんのアホーーーー!!!!」

「だ、だって、静かにお茶したかったんだもん．．．」

「言い方ってもんがあるだろー!!!!」

うづくまっている梓に、漣先輩が近づいた。

「ご、ごめんな？梓。あの先生ちょっと変なの．．．」

「こんなんじゃダメですーっ!!!!」

「うわーっ!!キレた!!!!」

「みなさん、やる気が感じられないです!!!!」

まあ、お茶飲んでるんだしな．．．

「いやー・・・新歓終わったあとだし・・・」

「そんなの関係ありません!!」

このとき初めて、梓が大きく見えた・・・



### 第三十話 ネロミミー！

「はあ・・・」

「ん？梓どうした？」

「昨日あんなこと言っちゃったし、行きにくいなあって・・・」

「まあ、大丈夫だろ！」

どうせあの先輩たちのことだ。

今日も懲りずにケーキを食べたり、お茶を飲んだりしているのだから。

階段を上り、“部室”という名の“喫茶店”へと入る。  
がらっ

「・・・」

予想的中・・・

「い、今練習するところだったんだよ？」

そういつと、唯先輩はいそいそとギターを持ち始めた。

バタッ

「ケーキ食べないと、力出ないよう・・・」

「はい、唯ちゃん」

そこにすかさず、紬先輩がやってきて、唯先輩の口にケーキを入れた。

唯先輩は水を得た魚のようになり、ジャラアアアン、とギターを弾いて見せた。

「う、うまいー！」

「ほら、拓也くんも梓ちゃんもケーキ食べたらず？」

「あ、いただきます・・・」

もらったケーキを一口、口に入れる。

「お、おいしい・・・」

「おいしい・・・」

「梓？なんだって??」

「お、惜しい!!--」

「何がだよ!!--」

そこに、顧問の先生がやってきて、「ケーキ食べてるじゃないの!!--」と、はしゃいでケーキを手を取った。

そして、その後ろから、勇気が来た。

「お、勇氣。最近何してたんだ？学校にも来てなかったし・・・」

「ちょっと、単身赴任してる親父が、体調崩しちゃって・・・」

「そうか・・・それだったらしょうがないな」

勇氣の家は、意外と複雑な感じらしい。

俺もよく知らないが・・・

「そういえば、梓ちゃんなんでティーセット撤去しなかったの??」

「それは・・・なんでもかんでも、否定するのはダメだと思って・・・」

どっちが先生なんだ・・・

「そうそう！梓ちゃんにプレゼント持ってきたの!」

「・・・なんですか、これは？」

「なになって・・・ネコミミよー!!」

「いや、ソレは分かるんですけど・・・これをどっしると?」

「じじするのよ!..」

そういつて先生は、梓の頭に無理矢理、ネコミミをつけた。

あまりのかわいさに、軽音部の部員が一気に静まり返る。

「あ、梓ちゃん!にゃーんって言うてみて!」

「に、にゃーあ?」

「今日からあだなはあずにゃんね!..」

俺は梓のかわいい姿を見て、しばらく動けなかった・・・

第三十一話 親父・・・？

「あぐずにゃん？」

「や、やめてください！唯先輩！」

一ヶ月前から当たり前になった光景を見ながら、俺、夏季拓也は思う。

「拓也？何ににやけてんだあ？」

後ろから律先輩に言われてしまった。

自分自身ではにやけているつもりは無かったのだが・・・

「いや・・・なんにもないっすよ？」

「そうかあ？本当はだきしめられたいんじゃないのかあー？？」

「そ、そんなことは・・・」

梓の目が厳しい・・・

「拓也くんも抱きしめてあげようか?？」

唯先輩がじりじりと攻め寄ってくる・・・

「うわっ!」

運動神経の悪い唯先輩は、ジャンプしたものの俺の10センチ手前で落下。

「大丈夫ですか?唯先輩・・・」

「フフ、拓也くん。だまされたね!これも作戦なんだよ!!」

そういつて、俺に抱きついてきた。

となりに梓がいるのに・・・

でも、かなり気持ちいい・・・

腹の辺りに最高にやわらかい感触がぁー。 . . .

そして、唯先輩が耳元で . . .

「拓也くん？硬いのが当たってるよ？」

「なっっ！!!」

「うそだよ！そんな本気にしなくても。」

「は、ははは！ですよねっ！!!」

あぁ . . .

梓の反応が怖い . . .



\*\*\*

まあ、いろいろありましたが、何とか助かりました

「な、なあ、梓？今日の夕飯なにがいい？？」

「肉かな？」

「に、肉な！分かった！」

いつもなら梓は怒るが、今日は怒らないらしい・・・

「俺はスーパー寄ってから帰るけど、梓はどうする？」

「じゃあ、私もよってく〜」

・・・今日は怖いくらいに上機嫌だ。

ちょっと調子が狂う・・・

スーパーで肉などを買いそろえ、家へと戻る。

結局、メニューはポークソテーにしてみた。

ソースは、和風にねぎしょうゆで・・・

「拓也？パソコン使っていい？」

梓は、デスクトップのPCを指差す。

「いいけど、変なもの見るんじゃないぞ〜！」

「大丈夫！拓也じゃないから！」

梓は笑いながらそう答えた。

・・・俺だって毎日見てるわけじゃないぞ！

「ん？なんかいった？」

「いや、なんも・・・」

梓の耳のよさに驚いたところで、俺は調理を始めた。

豚肉を包丁でたたいている時に、俺の電話が鳴った。

「梓、取ってくれ」

「はい。」

携帯をスライドさせ、見慣れない番号に首をかしげる。

「はい・・・」

『お、拓也か？』

「お、親父？」

『そつだぞ〜』

「てか、用件は何だ？今アメリカだろ？」

ちなみに、俺の親父は世界でも有名な外科医なので、アメリカの大学に教授として呼ばれている。

『え〜つとなあ．．．』

「？」

『アメリカに、来てほしいんだが．．．』

「はあ？今なんて．．．」

『だから、アメリカにこいって言ってんだよ！！』

「ふざけんなっ！理由を言え！！」

突然の大声に、梓は驚いたようだった。

「ツーツーツー・・・」

「切りやがった・・・あのクソ親父！」

怒りのあまり、スライド式の携帯を壊しそうになる。

「拓也？どうしたの??」

「な、なんでもない。気にするな。」

「そう?ならいいけど・・・」

そういつて梓はまたパソコンに向かい始めた。

いきなり何なんだ・・・?

確実に親父の様子がおかしかった。

「何だっつてんだよ・・・」

頭の中を、“悪い予感”がよぎった。

その“悪い予感”が何かは詳しくは分からないが・・・

「ねえねえ、拓也つてみずがめ座だよね？」

「そうだけど・・・なんで？」

「ほら、これ見てよ！今年最大の災難があるって！」

梓はパソコンの前で大笑いしているが、さっきの親父からの電話により、俺にとっては笑えなかった。

「それより、ご飯まだ？お腹すいたあ・・・」

「おう、悪い悪い！もうちょいでできぬぞ〜」

「ほね、食っていいぞ〜」

「いただきます。おいしそう！」

喜んでいる梓を横目で見ながら、俺はパソコンのディスプレイをしばらく見つめた……

## 第三十二話 預金がっつ！

『今日の十二位は、残念！！みずがめ座のあなた』

某テレビ局の朝のニュース番組の占いコーナーで女子アナが明るい声でいった。

それと同時に、梓から『占い見た？ドンマイ（笑）』とメールが来る。

「今の俺にとっては、笑い事じゃねえってのに・・・」

少しふてくされながら、昨日の電話を思い出す。

電話っていうのは、親父からの電話だ。

なぜ親父が、『アメリカに来い！』といったのかが分からなかった。

今まで俺から離れるようにして暮らしてきた親父が、なぜそんなことを言うか、親父の意図が分からなかった。



「まあ、悩んでも仕方ないし、学校行くかな・・・」

重い腰を上げ、ゆっくりと立ち上がる。

かばんを取り、テーブルにおいてあるスマートフォンと、スライド式の携帯をポケットに入れ、テレビの電源をオフにして、すべてのカーテンを閉めた。

俺以外に誰も住んでいない家に向かって、「いつてきます」といつて、俺はこの家から少し離れた学校へと向かった……………

\*\*\*

「拓也、おはよ〜」

「おう、おはよう」

女子に声をかけられ、ありきたりの挨拶を返す。

そういえば、ここ一週間やけに女子に話しかけられる回数が増えたようだな……

それと、クラスの男子からの視線が痛い…

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴り出し、担任が教室に入ってくる。

いつもと変わらぬ朝だが、今日はいつもと少し違う。

なぜならっっ!!

明日から夏休みなのだ!!!!!!

俺の頭の中で、さまざまな妄想が膨らむ。

そのなかに、梓と海に行っている光景が…!

「誘ってみようかな…」

そんなことを考えているうちにもう放課後! (授業時間飛ばし

た！（笑）by作者）

部室へ向かう。

「…あれ？誰もいないのか？」

俺は掃除当番で少し遅れたのだが…

「おーい…」

部室を歩き回ると、ソファの横から、人影が見えた。

「だ、だれだ？」

どきどきしながら近づくと、そこにはぐっすりと眠る梓が…

「何だよ…驚かせやがって…しかも、ほんとによく眠ってるな」

周りをきょろきょろと見回し、もう一度梓に近づく。

「触っても…いいよな？」

なんてことを考えるが、自分の社会的地位を考え、伸ばした手を引っ込めた。

「ううん…」

「お、起きたか？？」

「うん。拓也はなにしてるの…あっ！もしかして寝顔見た？」

「まあ、見たかな」

笑いながらそう答えた。

恥ずかしそうに顔を赤らめながら、ほおを軽く膨らましている姿がかわいい。

「てか、先輩たちは？」

「なんか、みんな用事があるみたい。」

「そっか。二人でいてもしょうがないし、帰るか？」

「練習したいけど…帰ろうか。」

そっつい、俺たちは学校を出た。

「俺ちょっと金おろしに行ってくるけど、梓ついてくるっ？」

「うん…暇だし、ついていく！」

ところで、近くのコンビニへと直行。

俺はATMの前で、金を下ろし始めた。

「嘘……だろ？」

「？拓也どうしたの？」

「預金が…すべてなくなってる。」

「ええっ！」

こういう展開は、マンガなどで見ると面白いが、実際そうになると、かなりの不安に襲われる。

「どうすんの？」

「まだ金あるから大丈夫だけど……」

あるって言うっても、1万くらいしかない。

預金がなくなってた理由は多分、親父の仕業だろう。

とにかく早くアメリカにこいつてことか…

「梓、帰るぞ〜」

「えっ！お金は……」

「無くても何とかなる。ちょっと節約すればな…」

「そっか。」

まあ、節約よりも早く、パスポート取りに行かないとかな…

第三十三話 アメリカ上陸！ すぐに帰国（前書き）

お久しぶりです！

グラセフのアプリにはまってかけませんでした…

すいませんっ！（汗

では、本編どうぞ〜



### 第三十三話 アメリカ上陸！ すぐに帰国

「確かここら辺に…お、あつたあつた！」

俺は今、ほこりをかぶったダンボールに手を突っ込んでいる。

そして、探していたものは、3年前に取得したパスポート。

とりにいこうと思ったのだが、何よりも、金がなかったので、記憶を探って探すことにした。

「これで、アメリカにいけるな…」

行きたくはないが、金がなくなつたから仕方がない。

ちなみに、アメリカ行きチケットは、昨日、速達で送られてきた。

「梓にはいっておかないとな…」

携帯をスライドさせ、梓にメールする。

内容は、「ちょっと2日から3日、家を空ける。飯は一人で食ってくれ。」という単調なメール。

「…さてと、行きますか！」

あらかじめ用意してあった、キャリーバックを引っ張る。

鍵を閉め、新潟空港まで向かう…

\*\*\*

「あ、あぶねえ…はくところだった。」

よろよろの状態で、二度目のアメリカ上陸。

ちなみに一度目は、小3のときだった。

記憶はほとんどないが…

よろよろの体で、タクシーを止める。

「Times square」

「All right」

タクシーで、親父の待つタイムズスクエアへと向かう。

\*\*\*

「…なんだよ、いないじゃないか…」

「よっ！拓也ー！ー！」

「お、親父？」

親父と思われるサングラスをかけた人物を見上げる。

「おう、そつだぞ。しかし、拓也、しばらく見ないうちに変わったなあ…」

そついつて親父は、俺を見つめる。

「てか、親父のほづが変わっただろ…」

半年前までは、もっとまじめそうな感じだったのに、今は軽くチャラくなっている。

「で、用件は何だ？」

「それがだな、お前をこっちの高校に転入させようと思ってさ。」

「はあ？何言ってるんだ？」

「俺の息子となると、やっぱり頭がよくなっちゃいけないだろ？」

…いや、そういっわけでもないだろ。

「で、日本の学校よりも、こっちの学校のほづがレベルが高いから、転入させようと思ってさ。」

「しゅめん…親父の考えが自己中心過ぎてよく理解できない…」

「転入手続きはもうしておいたから、俺について来い。」

「はあ？俺は絶対に日本に帰るぞ。」

「仕送りはもうしないぞ？」

「くっ…」

正直親父がここまでひどい人だとは思わなかった。

「それよりも、拓也。なぜお前は日本にこだわる？3年前は海外の学校に行きたいと言っていたじゃないか。」

「それは…もう昔の話だ。」

「日本は、道も狭い上に、国土も狭い。そんなところにいる理由がどこにある？」

「いい国じゃねえか！！」

「…ああ、確かにいい国かもしれないな。人間もここと比べて、か

なり親切だ。」

「だろ？」

「だが、日本には、もう金を手に入れるチャンスがない。それと比べて、アメリカはどうだ？莫大な国土に、世界トップクラスの企業。拓也、お前も金好きだろ？」

「金は好きだが…俺には、まだ日本でやり残したことがある。」

「なんだ？言ってみろ。」

「それは…」

もちろん、女だなんていえるわけがない。

ムムムム...

俺の携帯がなった。

「え…」

自分でも、顔が自然に引きつっていくのが分かった。

「どづした？」

「親父、頼む！日本に帰らせてくれ！！」

「…理由は？」

「俺には…好きな女がいる！」

「そうなのか？だが、アメリカにもかわいいやつはたくさんいるぞ？」

「そうか、でも、俺はあいつを守らなくちゃならない。」

「どづゆじと…」

親父が言葉を言い終える前に、俺は携帯のディスプレイを見せた。

そこには、憂からのメールで、『梓ちゃんが、車にはねられたの！』

「中央病院に今すぐ来て！」という内容だった。

「これは…?」

「その梓ってやつが、俺の好きなやつだ。」

「そうなのか…」

「もしかしたら、俺のせいで梓が…」

「…どういう意味だ?」

「俺が、2日、3日家を空けるって言って、その事を詳しく言わなかったから、ボーっとして、車にはねられたのかもしれない。」

「…ていうか、どういう関係なんだ?」

「隣に住んでいるだけだ。飯をよく食いに来る。」

「…そうか。」



「てことで、俺は日本に帰らなくちゃならない…」

そういった直後、親父が財布から何かを取り出した。

「これをしばらく使え。」

親父が俺に何かを投げた。

「これは…」

VISAのクレジットカードだった。

「使っていいのか？」

「ああ、しばらくな。後でまた振り込んでおく。」

「てことは、日本にかえってもいいのか…?」

「おう、その代わり、絶対にその子死なせんじゃねえぞ。」

「分かった！ありがとう!!」

そういつて、俺はタクシーを止めた。

「親父。」

「ん？なんだ？」

「これ、俺のメアド。暇だったらメールしてくれ。」

親父の顔が、赤くなっていくのが分かった。

「ば、バカ。俺に暇なんてねえ！それより、さっさと行けよ。」

「おう、ありがとな！」

そして俺は、今日きた空港へと向かった…

第三十三話 アメリカ上陸！ すぐに帰国（後書き）

タイトルの意味分かりませんよね。

正直僕もわかんないです。（笑

では、おやすみなさい〜

第三十四話 梓・・・(前書き)

お久しぶりです！

後今回短いです！

でわ、本編どうぞ

### 第三十四話 梓・・・

「クレジットカードOKのタクシーは・・・」

俺は今、飛行機を降りて、タクシーを探していた。

「あつた！」

そのタクシーは、俺を待っているかのように、入り口のまん前に停まっていた。

そして俺は、ドアを開け乗り込む。

「どちらまで？」

「中央病院へ。」

そついうとタクシーは動き出した。

梓の容態が心配になり、俺は不安な気持ちで、憂に電話をかけた。

トウルルルルル...

『はい？』

憂はワンコールで電話に出た。

『拓也だ。梓はどうなった?』

『手術は終わったけど、まだ意識がないんだ・・・』

『そうか・・・』

『それより、拓也くんいままでどこにいたの?』

『ああ、ちよつとアメリカまで行ってた。』

『ア、アメリカ!?!?』

電話越しでも、憂の驚きようが分かる。

『ああ、でも、今は日本にいる。ちよつと待ってくれ。』

『うん・・・』

憂に冷静な対処をした後、運転手に、「後どれくらいでつきますか?」と、問いかける。

自分では必死に愛想笑いを浮かべたつもりだが、顔が引きつって、なんともいえない顔になっている。

「え〜と…あと二十分くらいです。」

そう聞いて、また携帯に耳をあてる。

『あと二十分づくから、病院の外で待っててくれないか?』

『うん、分かった。』

そういつて電話を切った。

膝はガクガクと振るえ、変な汗がにじみ出てくる。

こんなに動揺するのは、あの時以来だ。

あの時とは、六年前のこと…

俺の母親が死んだ年だ。

死因は、交通事故による多量出血。

俺の母親の乗っていた軽自動車が、後ろから来たSUV車に追突された。

そんなことを思い出しながら、頭の中を悪い予感がよぎる。

もしかしたら、梓も

そう思ったとき、今まで梓と過ごした半年間の出来事が、走馬灯のようによみがえる。

初めて家に来た時や、一緒に勉強した時、そんなことを一瞬の間に鮮明に思い出した。

そして、目から涙がこぼれる。

泣いちや、ダメだ

俺は自分に言い聞かせる。

だってまだ、梓は死んだわけじゃない。

運転手が心配して、「大丈夫ですか？」と声をかけてくれた。

だが、今の俺には、それに答える余裕もなかった。

「つきましたよ。」

運転手がさわやかな笑顔で言った。

「ああ、どうも…」

財布からクレジットカードを取り出す。

「これでお願いします。」

「ああ、クレジットカードですか…」

運転手の顔が曇る。

「えっ！クレジットカードダメなんですか？」

「いや、時間かかるんですよ。お客さんお急ぎでしょ？」

「まあ、そつですが…」



「なら、今回は支払いいいです！」

「えっ！」

「さあ、早く行って！」

運転手が、俺の背中を押した。

走りながら後ろを向き、「ありがとうございます」と軽く会釈をした。

その運転手が、親父の友達だと知ったのは、かなり後のこと。

そして俺は、憂のいる方向へと走っていった…

第三十四話 梓・・・（後書き）

そろそろクライマックスです！

梓の容態はどうなるのか…

まだ自分も考えてません（笑

でわ、次話お楽しみに！

第三十五話 記憶喪失・・・（前書き）

こんばんわ〜

お久しぶりです!!

今回は、ちょっといろいろと悩んでたもんで・・・

更新遅れました（笑

でわ、本編どうぞ〜

第三十五話 記憶喪失・・・

ダッダッダッダッ・・・

俺と憂の走る音が、壁に反響して、妙に大きく聞こえる。

「梓は何号室だ？」

必死に走る憂に話しかけた。

「たしか・・・312号室だよ。」

「おお、そうか。」

階段を必死に駆け上がっているので、息が切れてきた。

なぜ階段を上っているかという点、エレベーターが上で止まっており、階段を上ったほうが早いと判断したからだ。

「じい・・・だな。」

“中野梓”と書かれた札がかけてある病室に、俺と憂は入った。

「あ、梓……」

そこには、小柄で華奢な体を寝かせた、梓がいた。

「手術してから、ずっとこの状態なんだ……」

憂が悲しそうな顔で言った。

「私は、もう遅いし、帰るね……」

「おう、そうか……」

携帯を見ると、時刻はもう10時。

「拓也くんは、帰らないの？」

「俺は……俺はまだ残るよ。」

「そっか、じゃあね。」

「おう。」

憂の足音が、だんだんと離れていくのが分かった。

そして俺は、梓に目を戻す。

「・・・人形みたいだな。」

髪を下ろした梓は、本当に人形のようにだった。

「こんなん、死なないよな？」

少し笑いながら、梓に問いかける。

だが、やはり答えは返ってこない。

「なあ、起きてくれよ。俺はまだ、本当の気持ちを、お前に伝えて

ないんだよ……」

梓が寝ているベットに、涙が一滴こぼれる。

「ははは、泣いちゃった。好きな女の前では、泣かないって決めてたのにな……」

それでも、どンドン涙はあふれてくる。

「なあ、止めてくれよ。涙を……」

梓の手を握る。

「いつもみたいにさ……」

さらに強く握る。

そして、疲れのせいか、意識が朦朧もろろとしてきた。

そして俺は、眠ってしまった。

そして、夢を見た。

俺と梓、そして、小さい男の子と三人で遊んでいる夢。

その男の子は、俺らの子供かな？

目は梓によく似ていて、ほかは俺にそっくりだ。

とても、幸せな夢だった。

「……うしたの？」

「？」

誰かの声で、俺は目を覚ました。

「ねえ、キミ？大丈夫？」

俺に声をかけたのは、憂でもなく、看護師でもなく、梓だった。



「お、おお！目が覚めたのか！！」

「目が覚めたって、さっきから起きてたよ。」

「おお、そうなのか。」

「うん。それより……キミは誰？」

「え……？」

「会ったことがあるような気がするんだけど、思い出せないんだ。」

「そ、そうなのか。」

「うん。」

「まあ、とりあえず医者を呼んでくるよ。待ってて。」

「あ……うん。」

俺は病室から出て、ゆっくりと身をかがめ、泣き始めた。

勝手に涙が出てきたのだ。

自然に。

俺のことを知らない？

てことは・・・

「記憶喪失、かあ・・・」

俺は悔しい気持ちで、後頭部を壁にぶつけた。

頭が、ずきずきと痛んだ。

だが、その痛みよりも、梓に忘れられた、いや、思い出してもらえないという悲しみが、その痛みを上  
回った。

息が、苦しい。

「とりあえず、医者を呼びに行こう・・・」

ふらふらとした足取りで、俺はナースセンターへと足を進めた。

第三十五話 記憶喪失・・・（後書き）

なんとっっ！

梓が記憶喪失に・・・

次回からは、拓也の反応をシリアスな感じにしたいと思います。

それではっ！

第三十六話 俺がそばにいる(前書き)

こんばんわ

また更新遅くなってしまいました・・・

すみません！

でわ、本編どうぞ

### 第三十六話 俺がそばにいる

「うん、ほかに痛いところはないかい？」

少し小太りの医者が梓に話しかける。

「はい、大丈夫です！」

梓はそういって、記憶を無くす前とほとんど変わらない様子で、そう答えた。

…信じらんねえな。

記憶を無くしてるだなんて。

前と全っ然変わんないのによ…

医者と梓の会話を聞きながら、俺は病室の前のだだっ広い廊下に行った。

「それじゃあ、しばらくはまだ安静にして置くよつに。」

「はい！」

声を聞く限りは、いつもの元気な梓なんだけどなあ…

そして、医者が病室から出てきた。

「拓也くんだっけ？」

「はい。」

「梓ちゃんの両親も来ている事だし、事情を説明したいんだけど…君もくるかい？」

「あ…でも、梓の親がなんて言うか…」

「大丈夫、もう了承はとってあるよ。」

意外と気が利く医者だなあ、と思った。

俺の親父と違ってさ。

「で、どうするんだい？」

「聞きます。聞かせてください！」

「…結構厳しいことも言うよ？」

さっきまで明るい顔をしていた医者顔が一気に曇った。

「これを聞かないと、俺は前に進めないから…」

「そうか。じゃあ、ついてきてくれるかい？」

「はい。」

その医者について行って、たどり着いた先には、『応接室』と書いている部屋だった。

「どつも…」



「拓也くん、そんなくらい顔しないで！ずっと梓のそばにいてくれたんでしょ？」

自分ではさほど暗い顔をしているつもりはなかったのだが、他人から見るとそう見えるらしい。

「はい、まあそうです…」

「ならいいのよ！あんまり気にしないでね。」

そういつた梓のお母さんの横で、梓のお父さんもうなずいていた。

「で、梓さんなんですが…」

医者が深刻な面持ちで話を始めた。

「梓さんの病名なんですが…、記憶喪失、のような障害が出ています。」

「よっな？」

梓のお父さんが口を開いた。

「はい、詳しく言うと、ショック障害のようなものみたいなんです。」

「そうなんですか…。で、その解決方法はあるんですか？」

「はい。普段親しかった人や、親族のみなさんが、話しかけてあげると、記憶は戻ると思います。」

「そうなんですか！」

梓の両親の顔が、パッと明るくなる。

「はい。彼女の場合、寝ている間に記憶が回復して、早ければ1週間ですべて戻ると思います。」

「そうなんですか！よかったあ…。」

俺を含む三人が、安堵のこえをあげる。

「ですが…。」

医者顔が一気に暗くなった。

「記憶が戻ると、その人とどんな関係だったか、思い出せなくなる場合があります。」

俺はこのとき、さっき医者と言った言葉を思い出した。

『…結構厳しいことも言うよ?』といていた。

どうやらそれは、このことだったらしい。

多分、あの医者は、俺のことを彼氏とかだと思っているのだろう。

俺は梓の彼氏でも、婚約者でもない。

だが、梓とであってから今まで、ずっと、俺はそばにいた。

だから、梓が俺のことをどう思っているか知らないが、俺はこれか

「私も梓のそばにいたい。」

「では、お話は以上です。」

「ありがとうございます。」

そういつて3人でお辞儀をして、応接室を出た。

「拓也くん？」

「はい？」

「もしよかったら、梓のそばにいてくれない？」

「え？」

「だって、梓のそばにずっといてくれたんでしょ？」

「はい」

「それなら、また見ててあげて。私たちがいるよりも、ずっと効果があると思うから。」

驚きを少し隠せなかった。

普通、年頃の娘を植えた狼みたいな男に任せるかな…

「まあ、いいですけど…」

「よかったあゝ。私たちが仕事でさあ…」

まあ、いろいろあるらしくて、俺がそばにいることになった。

前の梓なら大歓迎だけど、今の記憶を無くした梓とうまくやる自信はないんだけど…

「まあ、とりあえず行ってみるか。」

俺は梓のいる病室へと向かった。

「あ、拓也くん…だっけ？」

「うん。覚えててくれたんだ。」

「うん！前どっかであったような気がするんだよねあ……」

その言葉を聞いた瞬間、胸の奥がズキッと痛んだ。

「うん。会ったことあるかもね。」

「そうなんだ！どつりで覚えてるはずだ。」

「そうだね。それより、なんかほしいものとかあったら、俺に頼んでよ。」

「え？いいの？」

「うん。君が退院するまで、俺がそばにいるよ。」

「え？」

梓の顔が赤くなるのが分かった。

「そっか、ありがとう…」

少し照れくさそうに、梓はそういった。

「おう！じゃあ、そろそろ帰るな。明日からはずっとそばにいるよ。」

「うん、分かった。ところで、一つ聞いていい？」

「ん？なに？」

「君は、私の何？」

何っていわれても、友だちと言ったって梓が覚えているはずがない。

「俺は…、俺は君の、隣の家に住んでいる男だよ。」

まあ、本当のことだからな…

「そうなんだ！」

「うん。じゃあ、また明日。」

「ばいばいー。」

病室から出た俺は、何も考えないまま外に出た。

そして、家に帰り、少し悲しい気持ちを抑えるために、料理用のワインに口をつけた…。

酒の力を借りてでも、悲しい気持ちを抑えたかった。

この、胸の奥のズキズキと痛む思いを忘れたかった…



第三十六話 俺がそばにいる（後書き）

今回は、あんまし面白くないです…

まあ、次回に期待してください（笑）

それでは！

第三十七話 奇跡は意外と身近におこる（前書き）

またまた遅くなりました！

スイマセンっ

では、本編どうぞ〜

### 第三十七話 奇跡は意外と身近におこる

梓が記憶喪失になってから、1週間くらいたったところのことだった。

「こんにちは。」

「あ、拓也…だっけ？」

「おう、覚えててくれてサンキューな。」

「あ、うん。」

そのときだけ、梓がなぜか、浮かない顔になった。

「ねえ、一つ聞いていいかな？」

「おう、なんだ？」

俺が部屋に入ってから、少したったところのことだった。

「ねえ、拓也って、私のこと好きなの??」

「…それは、なんでかな？」

まさか、記憶が戻ったのだろうか。

少し期待をした。

「だって、ただのお隣さんが、そばにいるなんていわないでしょ？」

う…

確かに正論だ。

「うん、そうだね。でも、俺はキミを助けたいだけ…かな？」

俺は少し笑って答えた。

「そうなんだあ…。ちよつと残念。」

「え？なんで？」

「もし拓也が私のこと好きだったらいいのになあ、って思ったただけだよ。」

梓はその小さな顔を赤くしながら言った。

「そうか。じゃあ、梓は、俺のことどう思ってるのかな？」

勇気を振り絞って、俺は口を開いた。

「ん〜と、好き、だよ？」

予想外の答えに、俺は自分でも顔が赤くなっていくのが分かった。

「そ、そうなんだ。でも、俺のことはよく知らないでしょ？」

「うん。記憶喪失だからね。」

梓が笑った。

でも、結構長い間梓と過ごした体が、“この笑顔は、無理して作っている”と判断した。

ていうか、どこから知ったんだ？

梓の親も、憂も、軽音部の先輩たちも、医者もなにも言っていないはずだぞ？

俺は思ったことを口にした。

「梓、それはどこから聞いた？」

「うーんとね、自分で分かるんだ。なんていうのかな。体が覚えてるみたいなんだ。」

「…」

「拓也に会うとね、胸の奥が、痛くなるんだよ。これって、やっぱり好きだったことだと思うんだ。」

数秒間の沈黙が続いた。

「でもね、拓也の、どこが好きなのか分からないし、つらいんだよ……」

梓の体が、徐々に震えていくのが分かった。

そんな梓の小さな体を、俺は抱きしめた。

強く、強く。

梓の涙が、真っ白なシートに落ちていく。

俺はそれを見て、決めた。

ていうか、前にも決めたんだ。

“好きな女は、絶対に泣かせちゃいけない”って。

「なあ、梓。もし俺が、ここで好きだって言ったら、どっしりするっ。」

「なんで、今なの？」

梓が涙声で俺に問いかける。

「梓を、守りたいから。どんなときでも、泣かせたくないから。」

腕の中の梓が、少しずつ、震えが停まっていくなような感じがした。

「だから俺は、お前に告白する。なんか間違ってるか？」

「間違ってる、ないけどさあ……」

「そうか。俺が、前に、家族として好きだ、って言ったこと覚えてるか？」

おぼえていないと思うが、確認の意味で梓に問いかけた。

すると梓は、急に顔を上げた。

「拓也！！全部思い出した！！」



「ま、まじか！」

「そつだよ！なんで拓也のことを好きだったのかも思い出した！」

そつといって梓は、するりと俺の手の間をぬけ、俺のことを抱きしめた。

「ねえ、拓也？」

「ん？なんだ？」

「これで私たち、両思いだよね？」

梓が悪戯っぽい笑顔でそういった。

「んな！？恥ずかしいこというんじゃないよ……」

「えへへ〜」

「つたく……」

「ねえ、拓也？」

「今度は何だ？」

「あ・り・が・と・っ・つ？」

この時、多分俺の体温は、1度くらい上がったただろっつ……

第三十七話 奇跡は意外と身近におこる（後書き）

展開速すぎましたかね？

まあ、いいでしょう（笑）

残り二話でラストにしたいと思います！

ご期待ください（笑）

ではでは

第三十八話 性的…興奮？（前書き）

こんにちはわ〜。

いやー、iPod touchで書くと疲れますね…。

では、本編どうぞー

### 第三十八話 性的…興奮？

「まさか一週間で、完全に記憶が回復するとは…」

小太りの医者、驚きの声を交えて言った。

その言葉に、梓も嬉しいのか、ニコニコとしている。

「じゃあ、念のために、一応レントゲンとっておこうか。」

「はい！じゃあ、また後でね。」

「おう。」

そういって、梓は出て行ったが、なぜか小太りの医者は残っている。

「拓也くん…だったよね？」

「はい、そうですけど…なにか？」

「いやあね、どうやって一週間で記憶を完全に回復させたか知りたくてね。」

自分の顔が、沸騰するように熱くなるのが分かる。

あんまり思い出さないようにしてたのに…。

「で、それで君は、彼女を性的に興奮させたんだろ？」

「なっ！」

小太りの医者はいやにやとしている。

「そ、そんなことしてないですよっ！」

「いや、君はしたはずだよ。なぜなら、学会でこのような症状は性的な興奮をさせられれば、完璧に症状が治ると発表されたんだ。」

そんなバカな…と思ったが、学会のレポートをみせつけられ、黙りこんでしまう。

「そ、それなら、あなたが性的に興奮させれば、すぐに治ったじゃないですか！」

チツチツチツ、と小太りの医者はいさ指を左右に振った。

「それは、記憶を失う前に好きだった人じゃないといけないんだよ。逆に、好きじゃなかった人にやられると、悪化してしまうんだ。」

「そ、そうなんですか。いや、俺は別に、告白して抱きしめただけなんですけど…。」

赤裸々に俺は医者に言った。

「ふーん、そうなのかい。てことは、君たちは両思いなんだね？」

こういうのは、人に言われると、やけに恥ずかしくなるもんだ。

「まあ、そういうことになりますね…。」

徐々に声が小さくなってしまふ。

「ははっ！まあ、妊娠しちゃったときは、この病院にきてくれ。僕は産婦人科のほうが本業だからね。」

「なっ！まだ、そんな先のことを…」

「まあ、これを見せれば、僕がでてくるから。何かあったら言ってくれ。」

そういつて、名刺を差し出された。

「それじゃあ、僕は行くから。元気でね。」

「あ、はい。」

子供かあゝ…などと、まだ先のことを思いつつ、少しずつ顔がにやけていくのが分かった。

「何ニヤついてんの？」

聞き覚えのある声がした。

後ろを向くと、軽音部の皆様+憂がいた。

「梓ちゃんの記憶が戻ったって聞いたから、みんな連れてきちゃった！」

いつも通りの明るい笑顔で言った。

「ってか、何でニヤついてたんだ？」

律先輩が、肩を組みながら言うてくる。

「いや、まじで何にもないですよ？」

「そうかあ？ 梓となんかしたんじゃないのかー？」

うっ、そういえば、こういう時だけ鋭いって梓が言うてたな。

「ほ、ほんとに何もないですって！ それより！、今梓は検査受けるんで、ちよっと待っててください。」

「ほーい。」

唯先輩が気のない返事を返し、それぞれ話し始めた。

「ねえ、拓也くん？」

「はい、なんですか？」

珍しく、ムギ先輩が俺に話かけてきた。

「その、後でこれ梓ちゃんと食べて？」

そういつて手渡されたのは、しっかりとした紙袋に入った、ワンホールのケーキだった。

「皆さんで食べないんですか？」



「うん、二人で食べて！それより…」

ムギ先輩が耳元に近づいてくる。

その拍子に、女の子特有の、なんというか…、甘い香りがした。

そして今は、ムギ先輩の暖かい息が、首すじをなでている。

周りの軽音部の人たちにみつかるとんじやつ！と思い、まわりを見るが、こつちのことなど気にしてもない。

そしてムギ先輩は、ゆっくりと話し始めた。

「あのね、梓ちゃんが記憶喪失になったって聞いたから、うちの専属のドクターを呼ぼうとしたの。」

…そういえば、この人はとんでもない金持ちだった。

「それで、容態を話して、呼ぼうとしたんだけど、僕には治せませんって言われたの。」

ま、まさか、この人は、俺が何をしたか知っている？

「なんで、って聞いたたら、好きな人に性的興奮を与えられなきゃ、完璧に治らないって。」

そういうと、ムギ先輩は俺から少し離れた。

「大丈夫！誰にも言わないから！」

少し安心した瞬間、またもや安心を破ることをムギ先輩が言った。

「ちなみに、そのケーキには、媚薬が入ってるから…！夜に二人で食べてね？」

そういうと、遠くへ物凄いスピードで走り出し去っていった。

「どうすればいいんだ、これ…」

手の中にある、ものすごく危険な物を見つめる。

「とりあえず、梓の病室においてこよう。」

俺は、その危険物を持って、走り出した。

第三十八話 性的…興奮？（後書き）

残り二話で終わらせるといっていたんですが、もうちょっと長くなりそうです。

お付き合いよろしくお願い致します？

でわでわ〜

第三十九話 媚薬 . . . (前書き)

久しぶりだけど、短いです . . .

第三十九話 媚薬 . . . .

ムギ先輩からもらった、危険物と言っても他言ではない、媚薬入りのケーキを持ち、梓の病室へと向かっていた。

「これどうしろってんだよ . . . .」

ケーキの箱から、ケーキの甘さとはまた違う、ひどく甘い匂いがするような気がした。

そして、梓の病室についたはいいが . . . .

「クローゼットしかねえか . . . .」

そう思い、病室に備え付けのクローゼットに目を向ける。

手をかけるが、思いとどまって手を離れた。

普通、女子のクローゼットって、病室のやつでもあけていいのか？

恥ずかしながら俺は、女子の部屋にはあまりあがったことがない。

だが、アニメとかドラマだと・・・んまあ、下着だったり、いろんなものが入っているわけだ。

俺の知らない世界・・・。

もしかしたら、それを知る最大のチャンスなんじゃないか？！

クローゼットの扉に手をかけ、あけようとするが、またも思いとどまった。

男として、いや人間として最低じゃないか！と思い、ふるふると首を横にふる。

「何してるの？」

背筋が凍り付くような感覚と同時に、部屋全体の温度が少し下がったような気がした。

その声の主は、だいたいわかると思うが梓だった。

「く、クローゼットに何をしようとしていたの？」

梓の顔が、みるみるうちに赤くなる。

「そ、それは、このケーキを入れようと・・・」

「ケーキ?!」

・・・ああ、そうだった。こいつは甘いものには目がないんだった。

「おお、そうだぞ。ムギ先輩から貰ったんだ。」

「へえ！それなら、先輩たちにも分けないと・・・。」

そういつて、ナイフを探し始める。

普通なら、「俺も手伝うよ。」「あ、うん・・・」みたいな、少し  
気まずいながらも、恋人らしいシチュになること間違いなしなのだ  
が・・・。

なにしろ、そのケーキは媚薬入りだ。

これを先輩達に食べさせてしまったら、もう大騒ぎどころの話では  
ないだろう。

特に、ムギ先輩とかはヤバそうだ。

そんなことを考えているうちに、梓がナイフを見つけたしてしまった。

「あ、梓。このケーキはあとでゆっくり、ふたりに食べよう。な？」

「え？なんで？」

梓の、ケーキを食べたがる純粋な子供らしい目が、俺を襲った。

ここで、「このケーキは媚薬が入ってるんだよー。」なんていえた  
ら、どれだけ楽になるだろう。

こうなったら最終手段……。

俺はそっと梓を抱き寄せた。

そして、耳元でこう囁いた。

「俺は、梓と二人っきりでたべたいんだ。」



俺の体温が上がっていくのもわかったが、それより早く、梓の顔が真っ赤になっていることに気づいた。

梓は、本当に媚薬でも飲まされたかのような色っぽい声をだし、「うん．．．。」と返してくれた。

ふう、これで一件落着．．．と思った俺がバカだった。

これで、梓と俺が媚薬入りのケーキを食べることは決定事項だ．．．。

このとき、ムギ先輩が陰から、「計画通りね。」と、数人のSPと話しているのを見た人は誰もいない．．．。

先輩達と憂が、面会時間終了で帰った後、俺はなぜか梓の病室にいる。

ここからが、修羅場か．．．。

第三十九話 媚薬・・・(後書き)

お久しぶりです！

これからもよろしくお願ひしますm┐┐( )m

第四十話 キスの感覚（前書き）

また遅れてしまいました・・・（汗

## 第四十話 キスの感覚

「ケーキ、食べないの？」

「あ、ああ。まだ心の準備が．．．。」

梓は隣で、ケーキに心の準備がいるの？と問いかけるような顔をしている。

今は、梓の病室に二人きり。

時刻は午後8時を少し回ったところだった。

誰もいないので、お互いの呼吸がよく聞こえる。

なんか梓の呼吸が妙に色っぽくて．．．、ってそんなこと考えてる場合じゃないんだった。

んまあ、媚薬っていても、ムギ先輩もそこまで入れてないと思うし．．．。

どっちにしろ、食わなきゃいけないんだったら、早い方がいいよな。

鉄は熱いうちに打ってっていうだろ？（なんか意味違うような気がするが・・・。）

「よし！じゃあ、食うか！」

待ってました！といわんばかりに、梓の表情が一気にゆるむ。

「ねっ！早く食べよ！！」

「切るからちょっとまっとけ。」

俺がそういつと、梓は目をきらきらさせながらベットの上面に儀よく正座。

目を輝かせている梓は本当に子供のようだ。

・・・体型も含めてな。

もちろん、そんなことは声に出せるはずもなく、きれいにトッピングされたケーキを崩さないよう、慎重に箱から取り出した。

そして、梓が柵からだした、肉とかを切る普通の短いナイフでケーキを8等分に切ろうと試みる。

これが思った以上に難しい。

崩さないよう必死に切っている最中、俺はこんなことを考えた。

このケーキ、ご存じの通り媚薬という俺にとっては大変好ましくないものが入り交じっている。

この媚薬というもののことは詳しくは知らないが（むしろ知りたくもない）これが普通の薬と同じと考えれば、体が大きい方が薬の効果が回るのが遅いと考える。

つまり、俺と梓が5：3で食べば、少し何かあったとしても安全ではないか？

俺の頭の中で成立した方程式を正しいと信じ、きれいに8等分に切り出したケーキをナイフで刺し、一口で口に入れる。

「あー！なんで拓也先に食ってんの！」

梓はほおを子供のよつにぶくぶくと膨らませ、あらかじめ構えていたフォークでケーキを突き刺す。

一口では食えないだろ、と俺は心の中でせせら笑う。

だが、梓は一口で食べたのだ。

しかし、それが女子が男子、その上好きな人に見せていい顔なのか。。。

派手に口を広げ、一口でケーキを平らげた梓は、またフォークを突き刺しながら、あんぐりと口を開けて驚く俺をフッとバカにしたように鼻で笑い、2個目を口に運ぶ。

なんと食い意地の張ったやつだ。。。と思いつつも、まげじと俺もケーキを食らう。

だが、時すでに遅し。

梓はもう三個も平らげていた。

よって、俺が即興で組んだ方程式は泡のごとく消え去った。

結局、梓5個、俺3個と、予想の全く逆になってしまった。

ってかなんだ。

結局どうもならないじゃないか。

媚薬なんて俺にはきかねえ！と思った俺に天罰が下ったのか、急に眠くなるような感覚に襲われ、梓のベットに突っ伏した。

「ん．．．。」

鼻のあたりをくすぐる暖かくて甘い吐息で目を覚ました。

目を開けると、あたりは暗い。

たぶん、2時とか3時とかだろう。

目が暗さになれてきて、はっきりとみえるようになったとき、目の



前には梓の顔。

幸せそうに寝てるな．．．って、そんな冷静にこの状況にとけ込めるほど俺は大人じゃない。

ひどく処理速度の遅いパソコンのような寝起きの頭で、今の状況を理解しようとする。

まず、体が暖かいと感じるのは、布団と、梓の体温だ。

それと、暖かさが直に肌に感じられる。

イコール、俺は上半身裸だ。

ってことは．．．。

もしかして、俺卒業しちまったのかわっ？！

うれしいやら悲しいやら．．．。

たぶんこのネタをいったら、全世界共通で哀れみの目、または爆笑

されるだろう。

んまあでも、相手が梓だったなら、いいかな・・・。

ぐっすりと寝ている梓の整った顔を見つめる。

そして、梓のわき腹に手を忍ばせ、梓の、とても高校生とは思えない小さく、だけどとてもかわいい体を抱き寄せる。

梓の髪からふわっと香る、優しくて甘い香り。

梓が起きているかわからない、けど、俺は独り言のようにつぶやいた。

「俺の目の前寝ている、ちっこいのに頑張りやで、たまに無理してまじめで、たまに空回りもして、俺が世界で一番好きなたった一人の女子。」

梓の肩がピクっ、と震える。

「それが、梓、おまえだ。」

そういつた瞬間、俺は梓を強く抱きしめ、キスをした。

ああ、こんな感覚なのか。

本当に好きな奴とするキスってやつは。

柔らかくて、熱くて、優しい。

それから、全身がたぎるように熱くなっていく。

そう感じたとき、梓の手が俺の背中に回り、俺のことをきつく抱きしめる。

「わたしも、世界で一番好きだよ。拓也のことが。」

震える声で梓がいった。

「なんだ、起きてたのか。」

「あんなこといわれたら、どんなに熟睡してても起きちゃっつよー!」

「はは、そうか。」

俺は俺の短い人生のなかで、最高の幸せを感じた。

## 第四十話 キスの感覚（後書き）

なんか終わりっぽい雰囲気が出てますが、まだ終わりません（笑）

次回もよろしくですー

## 第四十一話 ある夏の深夜

なんとなーくいい雰囲気になったんだが、きかなければならないことがある。

「なあ、梓」

「なに？」

「なんで…俺は半裸なんだ？」

「あ、それはね！」

梓が話したことは、こうだった。

まず、俺がベッドに突っ伏した後、一回起き上がったが、すぐに寝てしまった。

それで、風邪をひかないように、ベッドに引っ張ろうとしたのだが、思いのほか俺が重く、服だけが脱げてしまい、俺にきさせようとしたが、困難だったため、必死に腕を引っ張りベッドにのせたそうだ。

その後、俺が梓に抱きついたそうだが…それより先はやっていないらしい。

梓は俺に抱きつかれたせいで暑くなったと照れながら怒っていた。

…多分それ、変な薬のせいですよ。

まあ、なにはともあれ、無事だったようだ。

…いろいろいな。

疑問が解け、少し安心したら、同じベッドにいたことがすこし恥ずかしくなったので、ベッドからたつ。

「どうしたの？」

キョトンとした顔で、俺を見つめる。

「外、行くぞ。」

ちら、と時計を見る。

時刻は3時をちょっと回ったところだ。

「でも…」

「大丈夫だ、お前は俺が守る。」

「うん…、着替えるからちょっと待ってて」

「おう」

さすがに着替えをみるのはまずいと思ったので、壁側に顔をむける。

「できたか？」

背中越しに尋ねる。

「…ん」

「おう、かわいい。」



水色のキャミソールに、短めのデニム。

シンプルな格好だが、梓の細い手足が見えて、なんとというか、エロかわいい。

「そ、そんな見つめないで…」

「あ、わ、悪い。んじゃあ行くか」

抜き足、忍び足でそーっと外にでて、裏口へと向かう。

「ねえ、開かないよ？」

「大丈夫だ。」

そういつて俺がポケットから取り出したのは、医者からもらった、裏口の鍵。

なにもいわずに、俺のポケットにつっこんできやがったから、返しようがなかったんだ。

「な、何で持ってるの?」

「さあな。俺も医者に無理矢理渡されたから知らん。」

苦笑顔で梓を見下ろす。

ぎい、という金属製の扉が開く音の後に、目の前に広がるのは、月だけが光を放つ、黒一色の世界。

そして、裏口に停めてあった、ビックスクーターにまたがる。

「そ、それ、拓也の?」

「いや、親父の。」

実は、アメリカに行った数日後、親父からのメールで、どこかの住所が書かれたものが送られてきたのだ。

時間制限付きで。

夏休みなのに暇を持て余していた俺は、チャリでそこに行くと・・・  
自動車教習所で、なんか知らんがイカツい顔のおっさんがこっちに手を振ってくるので、おそろおそろ近づくと、そいつはこ自動車教習所の講師だった。

それで、「おまえのために、3日で免許が取れるプランを用意しておいた。」とかいわれ、引きずられるようにして教習所へ。

そこでみつちり教えられ、無事に免許が取れた後、このスクーターを渡されたのであった。

ていうか、法的に大丈夫なのか？

んまあ、なにはともあれ、俺はバイクに乗れる。

「ほれ」

俺はピンク色のヘルメットを投げる。

そして俺も、黒のヘルメットをかぶる。

もちろん、これは俺が買ったわけではない。

あのおっさんから渡されたのだ。

ドゥルン、というエンジン音あたりの静けさが一気に奪われる。

「乗っていいぞー」

「うん」

そういつて乗った梓だが・・・。

「えっ！ちょっとこれ、足つかない・・・、うわっ！」

落ちそうになった梓を左手で受け止める。

「・・・」  
「抱きついていいぞ。」

俺は自分の腰を二度たたく。

「うん！」

ぎゅーっと梓は俺の腰ではなく、腹を抱きしめる。

「そ、そこ腹・・・」

後ろを振り向くと、子供のような、けど少し大人っぽい笑顔を見せるのであった。

(ちくしょう、かわいい・・・)

照れ隠しに俺は、アクセルをひねる。

「よし、行くか！」

けたたましい音を立てて、バイクは国道へと入った。

バイクは、誰もいない国道を滑るように走る。

背中から感じる、ほのかな暖かみと、柔らかな感触。

なんだ、こいつ胸あるじゃねえか。

背中に押しつけられている感覚で気づいた。

あ、今思ったが、こいつキャミソールだったな。

そう思い、路肩にバイクを止める。

「ほら、着ろよ」

俺は羽織っていた黒のパーカーを差し出す。

「でも、拓也も寒いんじゃない？」

貸してやるって言ってんだから、素直に着ればいいんだよ。

心の中でつぶやき、俺はパーカーを梓の肩に掛ける。

「……ありがとう」

「俺が連れだして風邪引いてもらっちゃ困るからな」

そういつてまたバイクにまたがり、国道に戻る。

この先には確か、海岸線へでる道があるはずだ。

ヘッドライトが照らす先に、ガードレールが見える。

そして、ざああん、と波の打ちつける音。

そして、磯の香り。

これでわかったかな？

俺が梓と行くところとしている場所、それは・・・海だ。

第四十一話 ある夏の深夜（後書き）

そろそろクライマックスです！



第四十二話 君の隣で（前書き）

遅くなつてすみません！

## 第四十二話 君の隣で

ヘルメットを脱ぎ、バイクからキーを抜く。

心地よい波風と、かすかに香る潮の香り。

海の家近くに乱雑に並べられたゴムボートなどが置いてあり、昏間の賑やかさを感じた。

まだバイクの上であたふたしている梓の両脇を抱きかかえ、バイクから下ろしてやる。

「なんで…海？」

「なんとなく、かな」

なにそれ、と笑う梓の横で、俺は空を見上げる。

流星でも流れないかなとか、UFOでもさがしてやるつか、とか思っているわけではない。

梓とあってから、今までのことを考えていたのだ。

最初はいきなり家に上がり込んでくるもんだから驚いたが、今では普通だ。

むしろ、前よりひどくなっているといってもいい。

「梓！ついてこいよ」

「え、うん」

携帯のバックライトで足元を照らし、シャリシャリとなる、唇間は白であったらう、今は黒の砂浜を歩く。

この時も、自然に二人の右手はつながっていた。

プラスチック製のベンチを見つけ、そこに腰掛ける。

時々ふと思う、こいつは何を考えているのだろうと。

少なくとも、俺と梓は不釣合だ。

絶対梓のほうかモテるだろうしな。

それなのに…こいつは俺を好きになってくれた。

「ねえ、拓也」

「なんだ？」

「あのさ…私のこと嫌じゃないの？」

「どっついう意味だよ」

「だって拓也かっこいいしな…」

「それはこっちのセリフだ！お前も相当可愛いだろうが」

「え！あ、うん…」

照れを隠すためだろうか、梓は下をむいた。

「ねえ、拓也。私たち同じこと考えてると思わない？」

「んー、どうだろうな。なんなら試してみるか？」

「え、どうやって？」

「今考えてることを言うだけだ」

「恥ずかしいな……」

「お互い様だ」

俺の考えてること……梓のことかな。

こんなことを実際に口にするなんて、どれだけ恥ずかしいのだろう。

「じゃあ、いくぞ」

「せーの……」

「梓のこと」

「拓也のことー」

…何だこの空気。

「拓也考えてること違うじゃん」

いたずらっぽい顔で言う。

「俺が俺のこと考えたたら気持ち悪いだろう」

「あはは。それもそうだね」

「まあ、いいんじゃないか？俺は…梓が俺のこと考えててくれるんだったら嬉しいけど」

徐々に声が小さくなっていく。

「わ、私も少し嬉しいよ」

「少し？」

「少しだよ」

「ほんとに？」

ニタニタした顔で尋ねる。

俺は今どんな顔をしているんだろうか。

「もーいじわるしないで！」

「悪い悪い」

「私は……」

「？」

「拓也のことが大好き！だから、拓也が私のことを考えてくれているんだったら、すっごく、すっごく、こーんなにうれしいよー！」

両手を思いっきり広げて、満面の笑みを浮かべる。

ああ、そうだ。

本当の幸せってまさにこれだろう。

こいつがいれば、何もいらぬ。

そう思える人がいれば、それはもう、これ以上ない幸せだ。

俺には、こんなに、こんなに、そんなことを思える人がいる。

いろいろあったけど、やっぱりこいつが必要になった。

こいつがいなければ、俺の、俺の中の世界は廻らない。

前に梓に言った、『家族として好き』って言葉は、俺の梓に対しての『家族になりたい』って思いだったのかもしれない。



自分のことなんか、わからない。

どんなに知ろうとしても、なぜかわからないが、俺の気持ちはすぐにどこかへ走り去ってしまう。

だけど今は、胸を張って言えるような気がする。

そう、こうやって…

「梓、愛してる」

俺の体全てが、俺のためだけに機能しているであろう脳までが、この頃のとりこになっている。

だから口が動いて勝手にこんなことを言って、手も勝手に動いて、梓の細い体を強く抱きしめてしまう。

ドクン、と激しく跳ねる心臓は、今ここに梓と俺が生きている証。

「私も、だよ」

俺の腰にまとわりつく梓の細い腕も、華奢な体も、俺の手に絡まる長い髪も、今は全て俺のものだ。

梓の体から手を離し、次の一言にありつたけの思いを乗せる。

にしてもあれだな、かなり緊張するもんだ。

親父もこんなことをやっていたのかと思うとゾッとする。

「卒業したら、俺と……」

「拓也！」

梓はベンチに立ち、俺と同じ目線になる。

そして梓は俺の首に自分の細い腕を回し、唇を俺の顔に寄せる。

熱くて、優しいキスだった。

唇が離れた瞬間、自分の血液が全て沸騰してしまったんじゃないかと思うくらいに体が熱くなった。

「拓也」

梓と目が合う。

「結婚、しよう?。」

上目づかいでこんなことを言ってくるもんだから、体中が熱くなつて仕方がない。

ここで一つ質問させてくれ。

こんな可愛い女の子に結婚を迫られ、きっぱりと断れる奴がいたら、俺の前に連れてきてくれ。

もし連れてきたのなら俺は、そいつを、精一杯の力で殴りつけてやる。

梓を悲しませる奴は、俺が許さない。

あれ？質問じゃなくなってしまったな。

まあ、なにはともあれ、こんなに早く婚約するとは思っていなかった。

「なあ、梓

」

ベンチに座っている梓を見る。

「こんなところで寝てんじゃねーよ」

頬をつん、とつつく。

今日くらいは、こんなところで寝るのもありかな。

俺もベンチに腰掛けると、梓は俺の肩にもたれかかってきた。

どんな夢を見てるんだろう、幸せそうな顔をしてるな。

一応病院をぬけだしてきただから、医者にメールしよう。

内容は、短く、10文字以内で。

『梓は帰さない』

そして、梓にも、短く、10文字以内で伝えよう。

「ありがとう」

誰でも言える、簡単な言葉だ。

だけど、俺にしか言えない。

俺だけの、『ありがとう』だ。

第四十二話 君の隣で（後書き）

まだ終わりません

第四十三話 位置情報サービス

あれ…

ここ、どこだ？

真っ白な世界。

そこから、赤と緑の世界に変わる。

目の前の葉は、もみじだろう。

どこかの山で、梓と二人きりだ。

そこで梓は、ギターを持って楽しそうに歌っている。

本当に、好きなんだな。

近くに来た梓の頭に触れようとしたとき、また視界が白に染まる。

数秒間、真っ白な世界が続いたあと、上からは雪のようなものが降ってきた。

いや、雪、らしいな。

手を出してそれに触れると、儂く消えていく。

だが、なぜかはわからないがそれは冷たくはない。

そう思った瞬間、景色が一気に切り替わる。

駅の南口、寒そうに葉をなくした木が、暖かく見える時間。

聖夜の、LED電飾によるイルミネーション。

そこにどっちら、俺は誰かと居るらしい。

左側に感じるのは、微かな温もり。

そうだ、よく考えれば、こんな時にいる相手なんて一人しかいな



いじゃないか。

「梓」

そう呼びかけると、優しく俺に笑いかけてくれる。

照れながらも、腕に下げたバックに手を伸ばした。

そこから出したのは、小さなリボンがかけられた箱。

それを受け取り、開けて中を見ようとした瞬間、またも景色が変わった。

目の前で吹き荒れるのは、ピンクの桜吹雪。

季節はおそらく春で、この風は春一番というやつか？

少し目を細め、5m先くらいになびく、黒い髪の毛の束を見つける。

胸には、造花の花飾り。

ギターを持った女子に泣かれてるぞ。

多分、後輩かな？

部員、見つかってよかったな。

またそう思ったとき、視界が一気に変わる。

真夏の、海。

軽音部の先輩方、勇氣、憂も含め海で遊んでいる。

律さんがフジツボで漣さんいじめてるぞ。

苦笑しつつ、俺も遊ぶか、とレジャーシートから立つ。

その時、パシャというシャッター音がした。

「あ…あれ？」

「寝顔ゲート！」

目の前にいるのは、にやにやと笑う勇氣。

「お前ら、ここで何を…？」

なぜかうまく働かない頭で必死に考える。

「女の子とバイクで二人乗りした上に海に来て一緒に寝るなんて野郎を夢から覚ましにきたんだよ」

あ、そうか。

さっきまでののは夢か。

どつりで景色が直ぐに変わったわけだ。

少し冴えてきた頭で、勇氣に尋ねる。

「携帯のGPS機能は結構使えるから覚えとけって言ったの誰だったっけか？」

「あ……」

「お前ずっとスマートフォンの位置情報サービス、オンにしてただろ」

ポケットから取り出してみて、設定を開くと、確かにオンになっている。

そのせいか電池の消耗が激しく、ディスプレイ脇の小さいランプは、ちかちかと点滅している。

「梓ちゃんのも同じ場所に反応があったから、もしかしたら、と思つて」

勇気の後ろからひょこつと出てきたのは、ほかの誰でもない、憂だ。

「お前もいたのか……」

一応確認のために、隣で寝息を立てている梓のポケットから二つ折りの携帯を取り出し、設定を確認する。

その自然な動作に、勇気が引いた目で、憂が赤くなってみていた。

「なんだよ？」

「お前、そんなことが普通に出来る奴だったんだな……」

「た、拓也くん……」

「お前らが何を言ってるのかさっぱりなのだが……」

そう言いつと、勇気はさらに引き、憂はもっと赤くなった。

「お前がそんな男だったとは……」

憂は言葉も発せずただただ真っ赤になるばかり。

「ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど、ど……」

「あのなあ……」

「勇気は、はあ…とため息をつきながら、すうーっと息を吸い込んだ。」

「寝てる女子の携帯を勝手にポケットからとって、それを見るようなデリカシーのない奴だとは思ってなかったってことだよ!!」

「はあ、はあ、と息切れをしながら勇気は言葉を発した。」

「んー…」

「寝ていた梓が起きたようだ。」

「ふあーあ…」

「猫のように背中を伸ばす。」

「占…」

「そついつと手からスマートフォンを取り、フルブラウザを開いている。」

目の前にいる勇気たちに気づかないのも驚きだが、それよりも自然な動作で俺の携帯をとったことが驚きらしい。

「やったー！1位だ…え?!」

1位の喜びと共に立ち上がり、目が覚めた梓は、勇気たちに驚き俺の携帯を落とす。

「おっと」

それを俺が難なくキャッチ。

「バカップル…」

頭を抱えて、勇気はぽつりとつぶやいた。

「ま、まあ、人それぞれ感性は違うから、ね？」

必死に憂が勇気を立ち直らせようとしている。

「お、俺がおかしいのか…」

「ゆ、勇氣くん！」

何か悪いことをしてしまったようだな。

まあ何を言われようとかこれは俺たちの日常なわけで…

あやまりようがないわけだ。

「ていうか、ここまで何で来たんだ？」

少しでも空気を良くしようと、寝起きの頭で考えた一番いい話題だった。

「チャリだよ。あいにく拓也みたいにバイク持ってないどころか免許さえないからね」

少し嫌味つたらしく聞こえるのは気のせいだろうか？



いや、気のせいじゃないな。

なんて思いつつ、まだ少し山に隠れている太陽を遠目に眺める。

「しかし、海まで来て何もしないのもなあ……」

何気なくつぶやいたのが、勇気の心に火をつけたらしい。

「海…水着…巨乳…貧乳…生足…あははははは」

火をつけたどころか、それが燃え広がって壊れてるぞ。

「まあ遊ぶのはアリだが、水着もなんもないぞ」

「買いに行けばいいじゃねえか、なあ！バイクもあるし」

ゆっさゆっさと俺の肩を掴んでくるもんだから、俺の視界は絶えずぐらぐらと揺れる。

「ガソリンあつたかなあ……」

「ガソリン代くらい俺が払ってやろう！」

こいつ、必死すぎんだろ。

「まあ、梓たちがいいんならいいけどな」

視線を梓と憂にむける。

「海、かあ。いいね！」

「私もいいよ」

という賛成の声が聞こえたので、仕方なく俺はバイクにまたがった。

「でも、まだ店やってないぞ」

「わかってる。腹減ったからメシだ。何がいい？」

「パン、かな。カロリー低いやつね！」

「はいはい。憂は？」

「私も梓ちゃんと同じやつで」

「俺はなあ…普通の」

「何言ってるんだ。お前もついてこい」

「な、なんでだ？男と二人乗りしたいのかよ」

わけのわからないことを言い出したのでヘルメットで思いっきり殴りつける。

「いってえ…」

「ガソリン、払ってくれんだろ？」

「え、マジでないのかよ？」

「あたりまえだ。遠くまで行くことなんか考えてないからな」

「マジかよ…今月ピンチなんだよ」

「知ったことか」

キーをまわし、ウインカーが点滅する。

「ほれ」

ピンクのヘルメットを投げ渡し、早く乗れよ。と催促する。

「ピンクかよ…」

「お前のために買ったわけじゃないからな。我慢しろ」

「お、おい。これ入らないんだけど!」

「じゃあ頭にのっけとけ。行くぞ」

「お、おい。予想以上に怖い…うおっ！」

朝日で照らされる海沿いの道を、叫ぶ勇氣とバイクを走らせるの  
だった。

第四十三話 位置情報サービス（後書き）

まだ続きそうです…笑

第四十四話 リッター1km(前書き)

タイトルに特に意味はありません(笑)

## 第四十四話 リッター1km

「ちょ、ちょっとストップ！」

「一応つかまっとけよ。死にたいんならいいけど」

24時間営業しているセルフのガソリンスタンドに付いたので、バイクを給油機脇に停める。

「満タンな」

「え、5リットル位でいいんじゃないの？」

「このバイクリッター1キロだからさ……」

「んなわけないだろ！てか車より下じゃねえか！」

「そうだな。でもそれを確かめられるか？」

「うっ……ネットで調べれば……」



「もし俺が改造しててほんとにリッター1キロでしか走れないような改造してたら？」

「無駄な改造だな……」

「でもそれをお前は確かめられない」

「…わかったよ。満タンな」

どつやらあきらめたらしい。

「ここはありがたくおごってもらおうか。

勇気が差し出した3000円をいれて、ガソリンをバイクへと入れていく。

「なあ、それはそうと、お前らどこまで行ったんだ？」

「…どっかまで行ってっ」

少し睨んでやる。

「怖い顔すんなって。友達だろ？俺ら」

「こついつときだけ友達面するやつと友達になった覚えはないね」

「母さん…拓也が反抗期です…」

「お前は俺の親父か！そもそも反抗期じゃないし」

「最近冷たいじゃんか」

「最近じゃなくて今だけだ」

「なんでキレてんだよー。寝顔とったからか？」

「違う。俺は憂とお前が付き合ってたのを言ってくれなかったのにキレたんだ」

「え、え、つ、付き合ってたなんか、ないぞ？」

慌てすぎだろ。

これはバラしてるようなもんだぜ、と心の中で笑う。

「そんな浅い仲だったのか、俺たち」

「そ、そんなことは…」

「分かってたつもりだけど…面と向かって言われるとショックだな  
…」

どうだ俺の演技力。

「わ、悪い、そんなつもりじゃなかったんだ。ただ、言うタイミングが」

「まあそんなことは気にしてないんだけど」

「なっ、騙したな?!」

「誘導尋問だ」

「まあいいや。そういうことだから、よろしく」

なにをよろしくなんだ。

「じゃあ、なんでイライラしてたんだよ」

「えつとなあ、海入るって言ったろ?」

「ああ、最高じゃねえか」

「お前のはな。こっちのは、これが、これじゃんか」

俺は自分の手のひらを胸に当て、それをまっすぐ下へと下ろす。

「ああ…。でもお前貧乳LOVEだったじゃんか」

「変なこと言うな。俺は普通派だ」

「そうだったか？でも、梓ちゃんの肌が見れるんだぜー！滅多にない最高のチャンスじゃねえか」

「それも嫌なんだよ」

「どついつ意味だ？あつ、もしや、普段から見てるから見なくていいってことか？くうー」

「変な声出すな、気持ち悪い。」

「だからなあ、その、他の男にあんまし肌を見せたくないんだよ」

「おー！嫉妬ってやつですか？」

「それとはちょっと違うだろ」

「でもよ、本当にチャンスなんだぜ？見たくないのか」

「……見たいけど」

「それならいいじゃねえか！親友よ！」

説得しても無駄みたいだし、仕方なく付き合っ  
てやるか。

…仕方なく、だぞ？

「カロリー低いのってなんだ？」

「サンドイッチとかでいいんじゃないか？」

「まあ、そうか。じゃあ俺はこれとこれ」

フレッシュサラダのサンドイッチと、カツのサンドイッチを俺は  
購入。

「おい、行くぞ」

「おい…これみるよ」

勇気が指差していたのは、18禁コーナー、いわゆるエロ本コーナーだ。

「これは…神クラスだ…」

「ほら、行くぞ」

勇気の耳を引っ張ってやる。

「お、おい。ちょっとくらいいいじゃねえか」

「憂が悲しくなるかもしれないだろ。付き合ってたんだっただらそれくらい考えてやれよ」

「だからって、自家発電はやめられないだろ」

「公の場で変なこと言っんじゃない。我慢だな」

「まじかよ……」

「まあ、感じ方は人それぞれだからな。とりあえず行くぞ」

コンビニを出て、バイクにまたがる。

キーをひねり、エンジンが点火する。

どういっわけか知らないがこのバイク、マフラーをいじったわけでもないのにやたらと大きい音がする。

まあ、そんな詳しくないし、直し方も分からないからそのまんまなのだが。

すっかり明るくなった海沿いの道を、なぜか俺は男を後ろに乗せて走っている。

悲しい、な。



と、思うけど、海には待ってる女子がいるもんで、そんな感情は少ししかないのだが。

どうやら勇気も恐怖に慣れたらしく、片手でヘルメットを抑えながら俺の肩に捕まっている。

「よし、到着」

「拓也、ちょっとガソリンメーター見せろよ」

「ああ、このバイクついてないんだ」

「嘘付け！」

「おーい！」

声のほうを見ると、梓と憂がこっちに向かってかけてきている。

「少し遅れた。悪いな」

「大丈夫だよ！」

俺は梓にサンドイッチを渡してやって、俺も自分で袋を開けて食べ始める。

「なあ、水着はどうするんだ？」

「バイク一台しかないし…往復か」

はあ、と予想以上に疲れるであろう運転を予想してため息をつく。

「じゃあ、とりあえず勇氣運んで戻ってきて、次は憂でその次梓か」

「それで行こうか」

「そうだね」

勇氣と憂から了承を得た。

「梓も、いいか？」

「私一人になっちゃうの？」

「まあ、そういうことになるが…」

しゅん、と梓が寂しそうな顔をした。

そんな顔は見たくないんだけどな…。

「んー、どうするかな」

俺が悩んでいると、憂と勇気が何やら話している。

「私は、梓ちゃんに水着は任せるよー！」

「俺も、拓也に任せるかな」

「あ、ああ、気を使ってもらって悪いな」

「別に大丈夫。俺らは、なー？」

一緒に首をかしげている。

クソ、勇気キモいな。

死んでしまえ。

「な、なあ、拓也。今ものすごい殺気を感じたんだが……」

「気のせいだ」

「憂、サイズ教えて。あと、何色がいい？」

俺は梓がこの言葉を発した瞬間、あーあ、と思った。

だって、ショックを受けること間違いなしだろ？

憂が梓の耳元でこによこによと囁く。

「え、は、はちじゅうさん!？」

「言っちゃダメだよぉー!」

顔を真っ赤にしている憂を見ながらチラッと勇気を見ると、こいつは鼻の下を思いつきり伸ばしてやがる。

「梓、行くぞ」

石化してしまった梓の手を握って、引っ張っていく。

「ほーら、いつまでも固まってるな」

少しずつ元に戻ってきた梓にヘルメットを渡して、俺はまたバイクのキーを回した。

第四十四話 リッター1km（後書き）

憂のバストは僕の推測ですので…（笑）

感想お待ちしております

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4763r/>

---

けいおん！ ~ light music love story ~

2011年12月28日23時48分発行